

6-20区（付図9・図版52・54）

D地区の南隅部で、東南辺は市道見出川羽倉崎線に面している。調査直前は駐車場であった。標高はLCでT.P.+5.75m、RUでT.P.+5.65mである。調査区の形状は底辺を西北に向けた台形である。調査面積は約360㎡である。

調査により確認した土層は基本的に5層あるが、遺物は出土しなかった。遺構の検出面は1面で、第5層上面でピットを検出した。

層序（第138図）

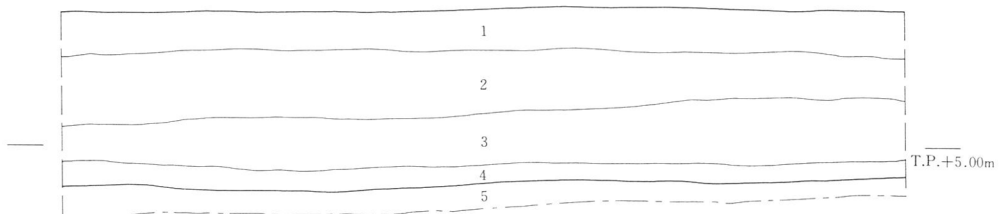
第1層 褐色土（灰色土・黄色土混じり：第II層）で、全域にはほぼ水平堆積している。層厚はLCで0.2m、RUで0.4mを測る。現代の盛土である。遺物は出土しなかった。

第2層 暗褐色砂質土（10Y R4/4：第II層）で、全域にはほぼ水平堆積している。上面の高さはLCでT.P.+5.50m、RUでT.P.+5.45mである。層厚はLCで0.2m、RUで0.7mを測る。現代の盛土である。遺物は出土しなかった。

第3層 黄褐色砂（10Y R5/6：第II層）で、全域にはほぼ水平堆積している。上面の高さはLCでT.P.+5.25m、RUでT.P.+4.95mである。層厚はLCで0.1m、RUで0.2mを測る。現代の盛土である。遺物は出土しなかった。

第4層 暗灰黄色粘質土（2.5Y 4/2：第III-a層）で、全域にはほぼ水平堆積している。上面の高さはLCでT.P.+4.95m、RUでT.P.+4.85mである。層厚はLCで0.1m、RUで0.2mを測る。耕作土である。遺物は出土しなかった。

第5層 明黄褐色土（10Y R6/8：第IV層）で、南西方向に低くなり、全域に広がっている。上面の高さはLCでT.P.+4.90m、RUでT.P.+4.75mである。地山である。遺物は出土しなかった。



第138図 中開遺跡6-20区基本土層断面図

遺構

01-OP NAの南部で検出した不整円形のピットである。直径0.6m、深度0.2mを測る。埋土は1層で、暗赤褐色土（5Y R3/4）である。遺物は出土しなかった。

まとめ

時期不明のピット(01-OP)を検出しただけである。耕作土を確認したが、周辺調査区の耕作土とは多少色調・土質が異なっている。

6-10区(付図9・図版52・54)

D地区の西南辺で6-20区の西北に当たる。調査直前は水田であった。標高はT.P.+4.70mである。調査区の形状は底辺を東北に向けたL字形である。調査面積は約1,700㎡である。

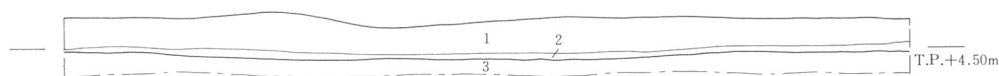
調査により確認した土層は基本的に3層あり、第2層で近世の遺物が出土した。遺構の検出面は1面で、第3層上面で土坑、溝、鋤溝、落ち込みを検出した。

層序(第139図)

第1層 黒色土(2.5Y2/1:第III-a層)で、全域に水平堆積している。層厚は0.2mを測る。耕作土である。遺物は出土しなかった。

第2層 明褐色土(7.5YR5/8:第III-b層)で、全域に水平堆積している。上面の高さはT.P.+4.50mである。層厚はLMで0.2m、QTで0.1mを測る。床土である。遺物は近世の磁器が出土した。

第3層 黄色粘土(2.5Y8/8:第IV層)で、東北に向かって緩く傾斜しており、全域に広がっている。上面の高さはLMでT.P.+4.30m、QTでT.P.+4.40mである。地山である。遺物は出土しなかった。



第139図 中開遺跡6-10区基本土層断面図

遺構

01-00 JBの東北部で検出した半円形の土坑である。東北東側は側溝に切られている。肩部直径0.8m、底部直径0.4m、深度0.16mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層であり、灰黄褐色土(10YR5/2)である。遺物は出土しなかった。

02-00 JBの中央部で検出した底辺が東南を向いた隅丸五角形の土坑である。長軸が西北方向を指す。東南側は側溝に切られている。肩部検出長径1.9m・短径1.5m、底部検出長径1.6m・短径1.0m、深度0.11mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層であり、灰黄褐色土(10YR4/2)である。遺物は出土しなかった。

03-00 JAの中央部で検出した不整楕円形の土坑である。長軸が東北方向を指す。肩部長径1.4m・短径0.9m、底部長径0.9m・短径0.5m、深度0.13mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層であり、灰黄褐色土（10YR6/2）である。遺物は出土しなかった。

04-00 IRの東北部で検出した不整楕円形の土坑である。長軸が西北方向を指す。肩部長径1.2m・短径0.5m、底部長径0.8m・短径0.3m、深度0.16mを測る。断面形状はU字形である。埋土は1層であり、褐色土（10YR4/6）である。遺物は出土しなかった。

05-00 LVの西部で検出した楕円形の土坑である。長軸が南北方向を指す。肩部長径0.8m・短径0.6m、底部長径0.3m・短径0.3m、深度0.26mを測る。断面形状はU字形である。埋土は1層であり、褐色土（10YR4/6）である。遺物は出土しなかった。

06-00 JQの中央部で検出した楕円形の土坑である。長軸が北北西方向を指す。肩部長径1.4m・短径0.7m、底部長径0.7m・短径0.4m、深度は一段目が0.22m、二段目が0.35mを測る。断面形状はU字形であり、底の北半部は二段になっている。埋土は2層あり、褐色土（10YR4/6）、灰色粘土（5Y6/1）である。遺物は出土しなかった。

07-00 MRの東部からMSにかかる不整円形の土坑である。肩部直径2.2m、底部直径1.8m、深度0.09mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層であり、褐色土（10YR4/6）である。遺物は出土しなかった。

08-00 KOの中央部で検出した不整楕円形の土坑である。長軸が東西方向を指す。西北部は側溝に切られている。肩部検出長径1.9m・短径0.7m、底部検出長径1.4m・短径0.4m、深度0.16mを測る。断面形状はU字形である。埋土は1層であり、黒褐色粘土（10YR3/1）である。遺物は出土しなかった。

09-0S NQの東南部からOQの東北部まで西南方向に曲線的に短く伸びる溝である。検出長1.5m、幅0.3m、深度0.1mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層であり、黒褐色粘土（10YR3/2）である。遺物は出土しなかった。

10-0S MUの西北部からOVの北部まで西北方向に直線的に伸びる溝である。東南端は調査区外へ伸びるが、不明である。検出長9.5m、幅0.6m、深度0.05mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層であり、灰褐色土（7.5YR4/2）である。遺物は出土しなかった。

11-0S IRの西部からKTの西南部を通してMVの南部まで西北方向に直線的に伸びる礫詰溝である。東南端は調査区外へ伸び、西北端は6-42区へ伸びるが、不明である。

検出長28.5m、幅0.4m、深度0.15mを測る。断面形状はU字形である。埋土は1層であり、灰褐色土（7.5YR5/2）であり、拳大の礫を多量に詰めてある。遺物は出土しなかった。

12-O S H Sの中央部からT Uの東北部を通してL Vの東部まで東南方向に直線的に伸びる溝である。H Sで側溝により切られている。検出長21.0m、幅0.5m、深度0.1mを測る。断面形状はU字形である。埋土は1層であり、褐色粘土（7.5YR4/3）である。遺物は出土しなかった。

13-O Z C Tの東部からJ Xの東南部で検出し直線的に伸びる鋤溝であるが、途中で数カ所途切れている。条数は5条あり、西北から東南に伸びている。長さ2.0~8.5m、幅0.2~0.4m、深度0.05mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、灰色土（7.5Y6/1）である。遺物は出土しなかった。

14-O R J Yの東部からM Wの東南部までで検出した不整長方形の落ち込みである。長さ16.5m、最大幅6.5m、深度は一段目が0.2m、二段目が0.25mを測る。断面形状は二段でテラスを有し、上部・下部ともU字形である。埋土は3層で、1段目には灰褐色土（5YR5/2）、2段目には暗赤褐色粘土（7.5R3/2）が0.2m、灰色粘土（N5/0）が0.05mである。遺物は暗赤褐色粘土から中世後半の陶磁器（図版55）・蝸壺が出土した。

15-O R I Vの東北部からK Wの南部までで検出した長方形の落ち込みである。西南部は現水路により未調査である。長さ10.5m、検出幅4.0m、深度0.1mを測る。断面形状は逆台形である。埋土は1層で、赤灰色土（7.5R5/1）である。遺物は出土しなかった。

まとめ

遺物を出土したのは14-O Rのみで、室町時代頃の陶器が出土した。そのほかの遺構からはまったく遺物が出土せず、時期的な決め手は何もない。しかし、各遺構の埋土の状況からある程度遺構をグループに分けることができる。最も新しいと考えられるのは13-O Zの灰色土である。時期的には近世後半から近代であろう。逆に最も古いと考えられるのは08・09-O Oの黒褐色粘土である。6-42区の遺構に多くみられた埋土と基本的には同じであり、時期的には弥生時代から古墳時代であろう。14-O Rは唯一遺物を出土した遺構で時期的には室町時代である。この遺物を出土した土層は暗赤褐色粘土であり、04~07-O Oの褐色土、12-O Sの褐色粘土、15-O Rの赤灰色土が同様の時期の可能性はある。01~03-O Oの灰黄褐色土、10・11-O Sの灰褐色土や14-O Rの灰褐色土が室町時代以降近世前半までの時期であろう。このあたりには多少人間の痕跡が窺えるが、住んでいた所からは多少距離があると考えられる。

6-42区（付図9・図版52・53）

D地区の西南辺の中央部で6-10区の西に隣接している。調査直前は倉庫と個人住宅であった。標高はT.P.+4.90mである。調査区の形状は底辺が西北を向いた台形である。調査面積は約970㎡である。

調査により確認した土層は基本的に5層あり、第3層で近世の、第4層で中世の遺物が出土した。遺構の検出面は1面で、第5層上面で土坑を検出した。

層序（第140図）

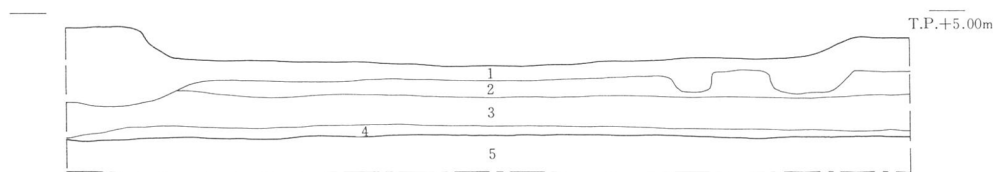
第1層 褐色土（灰色土・黄色土混じり：第II層）で、全域に水平堆積している。層厚は0.2mを測る。現代の盛土である。遺物は出土しなかった。

第2層 黒色土（2.5Y4/1：第III-a層）で、全域に水平堆積している。上面の高さはT.P.+4.70mである。層厚は0.1mを測る。耕作土である。遺物は出土しなかった。

第3層 褐色土（10YR4/4：第III-b層）で、全域に水平堆積している。上面の高さはT.P.+4.60mである。層厚は0.2mを測る。床土である。遺物は近世の陶磁器が出土した。

第4層 黒褐色粘土（10YR3/2：第X層）で、DOからKOより西に水平堆積している。上面の高さはT.P.+4.40mであり、層厚は0.05mを測る。遺物包含層であり、石鏟（図版2）・サヌカイト剥片・中世の蛸壺等が出土した。

第5層 黄褐色粘土（10YR5/4：礫混じり：第IV層・西端部は第VII層）で、全域にほぼ水平堆積している。上面の高さはT.P.+4.35mである。地山である。遺物は出土しなかった。



第140図 中開遺跡6-42区基本土層断面図

遺構

01-00 GRの西部で検出した楕円形の土坑である。長軸が西南西方向を指す。肩部長径0.85m・短径0.55m、底部長径0.6m・短径0.35m、深度0.7mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層であり、黒褐色粘土（7.5YR3/2）である。遺物は出土しなかった。

02-00 GQの北部で検出した楕円形の土坑である。長軸が東南方向を指す。肩部長径1.8m・短径0.8m、底部長径1.5m・短径0.5m、深度0.3mを測る。断面形状はU字形である。埋土は1層であり、黒褐色粘土（7.5Y R3/2）である。遺物は出土しなかった。

03-00 GQの西部で検出した楕円形の土坑である。長軸が東南東方向を指す。肩部長径1.3m・短径0.5m、底部長径0.85m・短径0.3m、深度0.25mを測る。断面形状はU字形である。埋土は1層であり、黒褐色粘土（7.5Y R3/2）である。遺物は出土しなかった。

04-00 GQの南部からHQの北部に伸びる楕円形の土坑である。長軸が東南方向を指す。肩部長径2.1m・短径0.7m、底部長径1.75m・短径0.3m、深度0.2mを測る。断面形状はU字形である。埋土は1層であり、黒褐色粘土（7.5Y R2/2）である。遺物は出土しなかった。

05-00 GOの東北部から溝状にHPの西北部に伸びる湾曲した楕円形の土坑である。長軸が東南方向を指す。肩部長径4.4m・短径0.9m、底部長径3.9m・短径0.55m、深度0.35mを測る。断面形状はU字形である。埋土は1層であり、黒褐色粘土（7.5Y R3/2）である。遺物は出土しなかった。

06-00 HPの西部で検出した楕円形の土坑である。長軸が東南東方向を指す。肩部長径1.2m・短径0.9m、底部長径0.8m・短径0.55m、深度0.4mを測る。断面形状はU字形である。埋土は1層であり、黒褐色粘土（7.5Y R2/2）である。遺物は出土しなかった。

07-00 HPの西南部で検出した楕円形の土坑である。長軸が西南方向を指す。肩部長径0.9m・短径0.7m、底部長径0.6m・短径0.4m、深度0.2mを測る。断面形状はU字形である。埋土は1層であり、黒褐色粘土（7.5Y R3/2）である。遺物は出土しなかった。

08-00 IPの北部（一部HPの南部にかかる）で検出した楕円形の土坑である。長軸が西南方向を指す。肩部長径1.3m・短径0.8m、底部長径0.85m・短径0.45m、深度0.25mを測る。断面形状はU字形である。埋土は1層であり、黒褐色粘土（7.5Y R3/2）である。遺物は出土しなかった。

09-00 IOの西南部で検出した楕円形の土坑である。長軸が西南西方向を指す。肩部長径1.5m・短径0.7m、底部長径1.0m・短径0.4m、深度0.2mを測る。断面形状はU字形である。埋土は1層であり、黒褐色粘土（7.5Y R2/2）である。遺物は出土しなかった。

10-00 ENの南部で検出した楕円形の土坑である。長軸が西南方向を指す。肩部長径1.55m・短径0.8m、底部長径1.2m・短径0.45m、深度1.5mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層であり、黒褐色粘土（7.5Y R3/2）である。遺物は出土しなかつ

た。

11-00 FNの西部からFMの東部で検出した楕円形の土坑である。長軸が西南西方向を指す。肩部長径1.7m・短径0.8m、底部長径1.25m・短径0.5m、深度0.35mを測る。断面形状はU字形である。埋土は1層であり、黒褐色粘土(7.5Y R2/2)である。遺物は出土しなかった。

12-00 HLの中央部で検出した楕円形の土坑である。長軸が北方向を指す。肩部長径0.6m・短径0.45m、底部長径0.3m・短径0.3m、深度0.2mを測る。断面形状はU字形である。埋土は1層であり、黒褐色粘土(7.5Y R3/2)である。遺物は出土しなかった。

13-00 GKの東南部で検出した楕円形の土坑である。長軸が西方向を指す。肩部長径0.85m・短径0.7m、底部長径0.6m・短径0.4m、深度0.2mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層であり、黒褐色粘土(7.5Y R3/2)である。遺物は出土しなかった。

14-00 GKの西部で検出した円形の土坑である。肩部直径0.7m、底部直径0.55m、深度0.15mを測る。断面形状はU字形である。埋土は1層であり、黒褐色粘土(7.5Y R2/2)である。遺物は出土しなかった。

15-00 GGの西北部で検出した楕円形の土坑である。長軸が西南西方向を指す。北北東端が側溝により切られる。肩部検出長径3.0m・短径1.3m、底部長径2.1m・短径0.7m、深度0.4mを測る。断面形状はU字形である。埋土は1層であり、黒褐色粘土(7.5Y R3/2)である。遺物は出土しなかった。

まとめ

遺構はすべて埋土が黒褐色粘土であり、遺物は出土しなかったが、時期的にはかなり遡るものと考えられる。黒褐色粘土を埋土とする遺構は周辺では6-10区の08・09-OSだけである。当調査区では遺構面である第5層に上部から黒色の滲み込みが認められ、第4層が部分的に薄く確認されただけであるが、本来的にはそこそこの層厚で周辺調査区を含め広く存在したと考えられる。6-D地区北端から6-E地区にかけて広く存在する遺物包含層は地形的に見ても6-D地区中央部及び周辺の土が人為的ではなく、自然に流されて堆積したと考えられる。当調査区の南部に弥生時代から中世の集落が営まれていた可能性は十分に考えられる。ただし、弥生時代は大規模な集落ではなく比較的小規模であり、中世の集落は遺物の出土量からもある程度の規模の集落の可能性が考えられる。

6-19区（付図9・図版52・56）

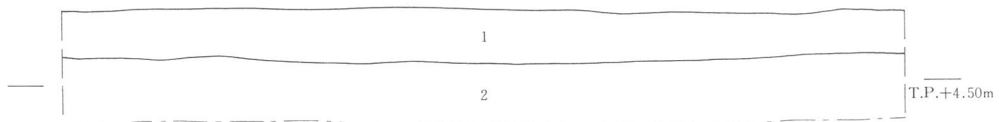
D地区の中央部で、6-10・25区の西北に隣接している。調査直前は大阪陶業（株）の駐車場であった。標高はB XでT.P.+4.60m、C LでT.P.+4.00mである。調査区の形状は底辺が北を向いた多角形である。調査面積は約830㎡である。

調査により確認した土層は基本的に2層あり、第1層で現代の遺物が出土した。遺構は検出しなかった。

層序（第141図）

第1層 褐色土（灰色土・黄色土混じり：第II層）で、西方へ向かって低くなり、全域に広がっている。上面の高さはB XでT.P.+5.00m、C LでT.P.+4.60mである。層厚はB Xで0.4m、C Lで0.6mを測る。現代の盛土である。遺物は中世の羽釜の破片が出土した。

第2層 黄橙色土（10Y R8/6：第IV層）で、西方へ向かって低くなり、全域に広がっている。上面の高さはB XでT.P.+4.60m、C LでT.P.+4.00mである。地山である。遺物は出土しなかった。



第141図 中開遺跡6-19区基本土層断面図

まとめ

掘立柱建物跡や井戸を検出したが、これらは駐車場造成以前のたまねぎ小屋の類いの建物であり、また井戸もモルタルの井戸枠で、ともに近年のものと判断されるものである。他にも土坑、溝等を検出したが、すべて近年のもので、攪乱として扱った。他に特記すべき遺構はない。

6-26区（付図9・図版52・57）

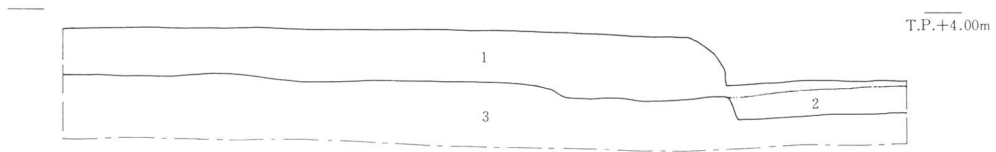
D地区の西隅で6-19区の西に隣接している。調査直前はビニールハウスとテニスコートであった。標高はD BでT.P.+4.00m、V QでT.P.+3.60mである。調査区の形状は底辺が西南を向いた五角形である。調査面積は2,200㎡である。

調査により確認した土層は基本的に2層あるが、遺物は出土しなかった。遺構の検出面は1面で、第2層上面で溝を検出した。

層序（第142図）

第1層 褐色土（灰色土・黄色土混じり：第II層）で、全域に広がっている。上面の高さはDBでT.P.+4.00m、VQでT.P.+3.65mである。層厚は0.4mを測る。現代の盛土である。遺物は出土しなかった。

第2層 黄灰色粘土（2.5Y5/1：第IV層）・CAから北東にかけて黄灰色粘土（2.5Y5/1）で、北東へ高くなり全域に広がっている。上面の高さはDBでT.P.+3.60m、VQでT.P.+3.25mである。地山である。遺物は出土しなかった。



第142図 中開遺跡6-26区基本土層断面図

遺構

01-O S UVの東部からVTの中央部まで西南方向に直線的に伸びる溝である。東北端は攪乱孔に切られ、西南端は浅く途切れている。検出長11.5m、幅0.3~0.6m、深度0.1mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層であり、褐色粘土（10YR4/6）である。遺物は出土しなかった。

02-O S VRの中央部からUTの東北部まで東北方向に伸び、UTでTUへ東北方向とUVへ東方向の2本に分かれている、Y字形の溝である。西南端は調査区外に伸び、東北端、東端は攪乱孔に切られているが、規模・埋土・方向等からは6-43区01-O Sにつながる可能性がある。検出長23.0m、幅0.3~0.6m、深度0.1mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層であり、褐色粘土（10YR4/4）である。遺物は出土しなかった。

まとめ

調査直前はビニールハウスとテニスコートであったが、さらに以前は工場もしくは倉庫であつたらしく煉瓦やコンクリートの基礎が縦横にあつた。その上、工場での廃棄物を建物の基礎跡に埋めたり、わざわざ掘削して埋めたりしており、攪乱ばかりであつた。明確な遺構は調査区西端部で検出した2条の溝だけである。この溝は埋土の共通性から6-43区の01・02-O Sにつながり、耕作に関係する溝と考えられる。時期的には近世末から近代と考えるのが適当であろう。

6-41区 (付図9・図版52・56)

D地区の東北辺で6-25区から大阪陶業(株)への進入路を挟んだ北に当たる。調査直前は駐車場であった。標高はVFでT.P.+5.35m、XIでT.P.+5.40mである。調査区の形状は底辺を東北に向けた三角形である。調査面積は約70㎡である。

調査により確認した土層は基本的に4層あるが、遺物は出土しなかった。遺構の検出面は1面で、第4層上面で溝を検出した。

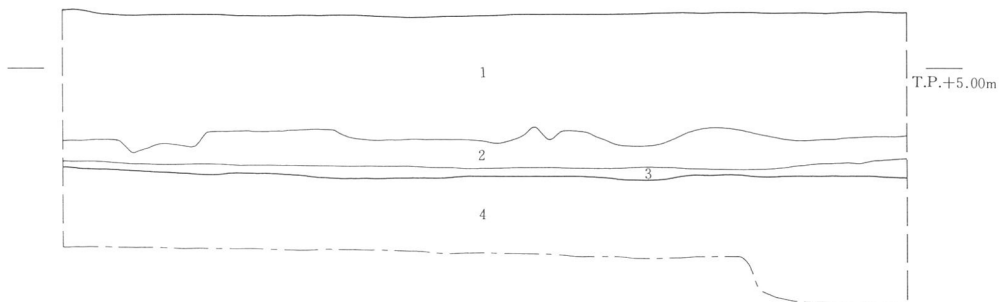
層序 (第143図)

第1層 褐色土(灰色土・黄色土混じり:第II層)で、全域に水平堆積している。層厚は0.75mを測る。現代の盛土である。遺物は出土しなかった。

第2層 黒褐色土(2.5Y1/3:第III-a層)で、全域に水平堆積している。上面の高さはT.P.+4.60mである。層厚は0.1mを測る。耕作土である。遺物は出土しなかった。

第3層 灰黄褐色砂質土(10YR5/2:第III-b層)で、全域に水平堆積している。上面の高さはT.P.+4.50mである。層厚は0.1mを測る。床土である。遺物は出土しなかった。

第4層 褐色土(10YR4/6:礫混じり:第IV層)で、北側が低くなっておりXIを境にして0.2mの標高差があり、全域に広がっている。上面の高さはT.P.+4.40mである。段丘礫層である。遺物は出土しなかった。



第143図 中開遺跡6-41区基本土層断面図

遺構

01-O S XHの北部からXGを通してXFの北部まで東方向に直線的に伸びる溝である。両端ともに攪乱孔により切られる。検出長8.0m、幅0.3m、深度0.2mを測る。断面形状はU字形である。埋土は1層であり、灰色土(5Y5/1)である。遺物は出土しなかった。

まとめ

6-4区01-O Sにつながると考えられる溝を検出しただけであり、時期も不明である。

6-4区 (付図9・図版52・58)

D地区の東北辺で6-41区の西北に当たる。調査直前は水田であった。標高はSDでT.P.+4.50m、GPでT.P.+4.10mである。調査区の形状は底辺が東北を向いた多角形である。調査面積は約840㎡である。

調査により確認した土層は基本的に4層あり、第3層で中世の遺物が出土した。遺構の検出面は2面で、第2層上面で溝、第4層上面で谷を検出した。

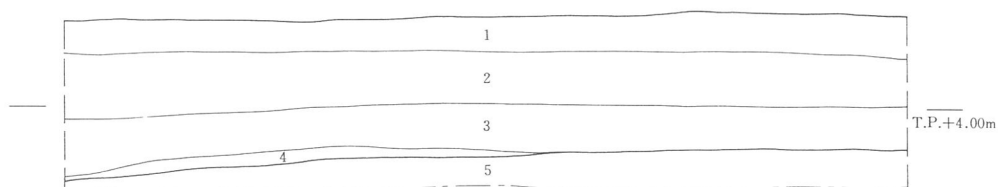
層序 (第144図)

第1層 黒色土 (2.5Y2/1:第III-a層) で、北側が低くなっており、LUを境として0.4mの標高差があり全域に広がっている。層厚はSDで0.2mを測る。現代の耕作土である。遺物は出土しなかった。

第2層 灰黄色砂・褐灰色砂質土 (上部が灰黄色砂、下部が褐灰色砂質土) (2.5Y6/2・10YR4/1:第VIII層) で、北側が低くなっており、LUを境として0.4mの標高差があり全域に広がっている。上面の高さはSDでT.P.+4.30m、GPでT.P.+3.90mである。層厚はSDで0.5mを測る。遺物は出土しなかった。

第3層 黒褐色粘質土 (7.5YR3/1:第X層) で、第4層上面の凹地に部分的に堆積している。上面の高さはT.P.+3.80mである。層厚は0.05~0.2mを測る。遺物包含層である。遺物は中世の瓦器等が出土した。

第4層 明黄褐色粘質土 (10YR6/6:第XIV層) で、LUを境として北西に向かって低くなり、全域に広がっている。上面の高さはSDでT.P.+3.80m、GPでT.P.+3.40mである。地山である。遺物は出土しなかった。



第144図 中開遺跡6-4区基本土層断面図

遺構

第1遺構面 (第145図・図版58)

01-O S WCの西部からVYを通してSWの西南部まで東南東方向に緩やかな曲線的に伸びる溝である。石詰の暗渠である。東南東端は調査区外へ伸びる。検出長24.5m、幅

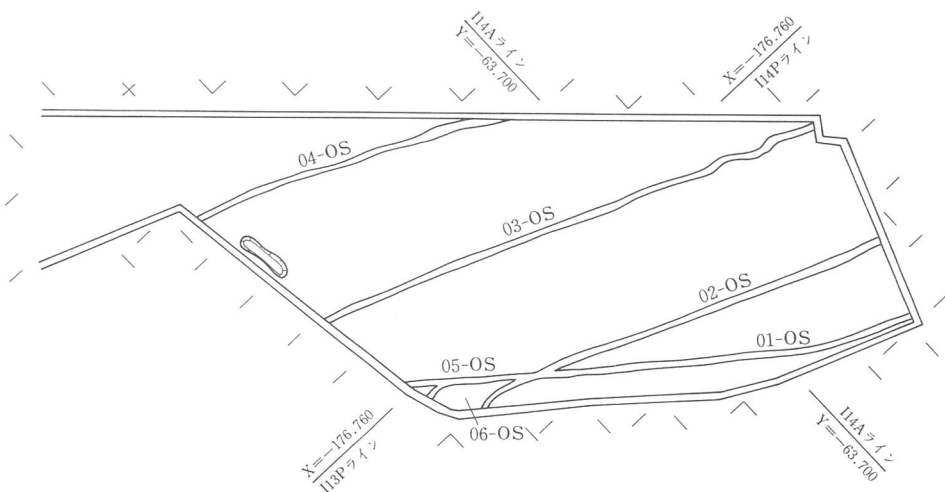
0.5m、深度0.15mを測る。断面形状はU字形である。埋土は1層であり、灰色土（5Y5/1：拳大の礫混じり）である。遺物は出土しなかった。

02-OS VYの西北部からUBの南部まで東北東方向に直線的に伸びる溝である。西南西端は6-43区へ伸びるが、不明である。検出長10.5m、幅0.3m、深度0.07mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層であり、灰色土（7.5Y5/1）である。遺物は出土しなかった。

03-OS QTの東北部からRYを通してSCの東南部まで東南東方向にほぼ直線的に伸びる溝である。石詰の暗渠である。東南東端は調査区外へ伸び、西北西端は6-43区へ伸びるが、不明である。検出長35.0m、幅0.4m、深度0.15mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層であり、灰色土（5Y5/1）である。遺物は出土しなかった。

04-OS NTの中央部からNVを通してPYの西北部まで東南東方向に緩やかな曲線的に伸びる溝である。石詰の暗渠である。東南東端は調査区外へ伸び、西北西端は6-43区へ伸びるが、不明である。検出長22.5m、幅0.4m、深度0.2mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層であり、灰色土（5Y5/1）である。遺物は出土しなかった。

05-OS RUの南部からTYを通してUCの中央部まで東南東方向にほぼ直線的に伸びる溝である。石詰の暗渠である。東南東端は調査区外へ伸び、西北西端は6-43区へ伸びるが、不明である。検出長31.5m、幅0.4m、深度0.15mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層であり、灰色土（5Y5/1）である。遺物は出土しなかった。



第145図 中開遺跡 6-4区第1遺構面平面図

06-OS SUの中央部からTYの西南部をってUCの南部まで東南東方向にはほぼ直線的に伸びる溝である。石詰の暗渠である。東南東端は調査区外へ伸び、西北西端は6-43区へ伸びるが、不明である。検出長31.0m、幅0.35m、深度0.15mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層であり、灰色土(5Y5/1)である。遺物は出土しなかった。

第2遺構面

07-OR RUとUCを直線的に結んだ北側を西北方向に伸びる谷である。西北側は6-3区の04-ORに続く。東南側は6-41区の北隅で僅かに認められる02-ORに続く。検出長47.0m、検出幅20.0m、深度0.5mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は3層で、上から灰黄褐色砂(10YR6/2)が0.2m、褐灰色土(10YR4/1)が0.2m、黒褐色粘土(7.5YR3/1)が0.1m堆積していた。黒褐色粘土からは中世の瓦器・土師器が出土した。

まとめ

東北半部の谷が中世以降に埋まり、その後全域が田畠として開発される時に肩部が削平されたようである。溝はその時に素掘りの溝に側壁として拳大の河原石を据え、人頭大の石で蓋をしたもので、その形状、構造は横穴式石室の排水溝に近似する。02・03・04・05-OSについては西北西方向に伸び、それぞれ平行する。01-OSについては西北方向に伸び、02-OSとはSVで、05-OSにはRUで交わる。03・04-OSがそれぞれ本区SB・SC付近、OW・OX付近では蛇行する。これは掘削以前、隣接道路から6-3区への進入路として重機、ダンプカー等が頻繁に通行していたため、進入路直下にあった両暗渠がその圧力を受けていたことによる。これらの溝は灌漑用の暗渠と思われる。明確に時期を決定しうる遺物は出土しなかったが、層序等から近・現代のものと思われる。

6-3区(付図9・図版52・59)

D地区の西北部で6-9区の南に当たる。調査直前は水田であった。標高はGOでT.P.+4.05m、AEでT.P.+3.90mである。調査区の形状は底辺が南を向いた台形である。調査面積は1,230㎡である。

調査により確認した土層は基本的に5層あり、第3層で中世の遺物が出土した。遺構の検出面は1面で、第5層上面で土坑、溝を検出した。

層序(第146図)

第1層 黒色土(2.5Y2/1:第III-a層)で、西北側が低くなっており、BGを境として0.2mの標高差があり全域に広がっている。層厚はGOで0.15m、AEで0.2mを測る。

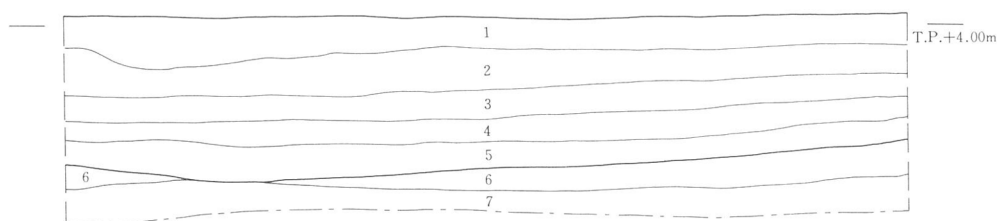
現代の耕作土である。遺物は出土しなかった。

第2層 灰黄褐色砂・褐灰色砂・褐灰色土（10Y R6/2・10Y R5/1・10Y R4/1：第Ⅷ層）で、南東方向に緩やかに高くなり全域に広がっている。上面の高さはG OでT.P.+3.90m、A EでT.P.+3.70mである。層厚はA Eで0.3mを測る。遺物は出土しなかった。

第3層 黒褐色粘土（7.5Y R3/1：第Ⅹ層）で、南東方向に緩やかに高くなり、F Mで途切れる。上面の高さはF MでT.P.+3.60m、A EでT.P.+3.40mである。層厚はA Eで0.15mを測る。遺物包含層である。遺物は中世の瓦器・土師器が出土した。

第4層 灰黄褐色砂（10Y R6/2：第Ⅺ層）で、E Kで南東方向に高くなりほぼ全域に広がっている。上面の高さはG OでT.P.+3.60m、A EでT.P.+3.25mである。層厚はA Eで0.15mを測る。遺物は出土しなかった。

第5層 灰黄褐色粘土（10Y R6/2：礫混じり：第Ⅻ層）で、下部にいくにつれて灰黄色、灰白色、青味がかり、礫が多くなる。E Kで南東方向に高くなり全域に広がっている。上面の高さはG OでT.P.+3.40m、A EでT.P.+3.10mである。地山である。遺物は出土しなかった。



第146図 中開遺跡6-3区基本土層断面図

遺構

01-00 B Eの中央から北部で検出した隅丸長方形の土坑である。長辺が西北方向を指す。肩部長辺5.0m・短辺2.5m、底部長辺4.3m・短辺1.6m、深度0.41mを測る。断面形状はU字形である。埋土は1層であり、灰黄色砂（2.5Y7/2）である。遺物は近世以降の陶磁器が出土した。

02-00 B Fの中央から東南部で検出した不定形の土坑である。肩部長径3.9m・短径1.8m、底部長径3.8m・短径1.7m、深度0.05mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層であり、灰黄色砂（2.5Y7/2）である。遺物は近世以降の陶磁器が出土した。

03-05 F Eの中央部からD Eを通過してB Fの西南部まで南南西方向に直線的に伸びる溝である。検出長15.0m、幅1.5~3.0m、深度0.22mを測る。断面形状はU字形である。

埋土は1層であり、灰黄色砂(2.5Y7/2)である。遺物は近世以降の陶磁器が出土した。

04-OR BGとFFを直線的に結んだ東側全域に広がっている谷である。6-4区の07-ORに続いている。検出長65.0m、検出幅20.0m、深度0.4mを測る。谷筋の中心はBGからEIを通り、ELで一端調査区東北へ出てしまう。再びHPから調査区内に現れ、6-4区へ続いている。断面形状は浅いU字形である。埋土は大きく2層に分けられ、上層が灰黄褐色砂・褐灰色砂・褐灰色土(10YR6/2・10YR5/1・10YR4/1)の互層が0.25m、下層が黒褐色粘土(7.5YR3/1)が0.15m堆積していた。黒褐色粘土からは中世の瓦器・土師器が多量に出土した。

まとめ

本区西端で検出した溝状遺構の本来の規模が後述する6-9区での状況に近いものであったとするならば、本区での深さ、幅とも狭小であることから、僅かながらも削平、整地等、何らかの地形改変を受けた。

6-9区(付図9・図版52・59)

D地区の北隅部に当たり、稲倉2号用水路を挟んだ6-3区の北側である。88年実施の試掘調査区No.45地点であり、調査区痕が残る。調査直前は水田であった。標高はWFでT.P.+4.40mである。調査区の形状は底辺が西北を向いた二等辺三角形である。調査面積は約140㎡である。

調査により確認した土層は基本的に4層あるが、遺物は出土しなかった。遺構の検出面は1面で、第4層上面で溝を検出した。

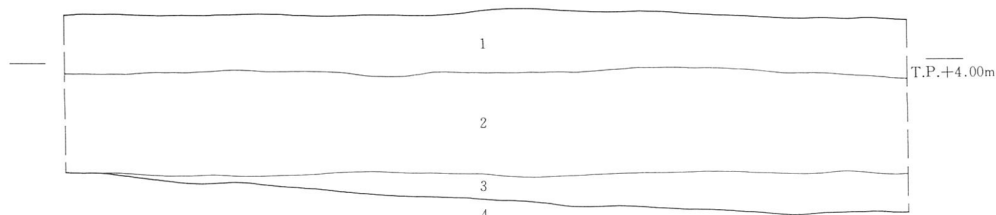
層序(第147図)

第1層 黒色土(10YR2/1:第III-a層)で、南東に向かって緩やかに高くなり全域に広がっている。上面の高さはWFでT.P.+4.40m、CLでT.P.+4.15mである。層厚はWFで0.3m、CLで0.65mを測る。耕作土である。遺物は出土しなかった。

第2層 褐灰色砂質土(10YR4/1:第VIII層)で、南東に向かって緩やかに高くなり全域に広がっている。上面の高さはWFでT.P.+4.10m、CLでT.P.+3.80mである。層厚はWFで0.4m、CLで0.3mを測る。遺物は出土しなかった。

第3層 黒褐色粘質土(7.5YR3/1:第X層)で、南東に向かって厚く堆積しており全域に広がっている。上面の高さはWFでT.P.+3.70m、CLでT.P.+3.50mである。層厚はWFで0.15m、CLで0.35mを測る。遺物包含層である。遺物は出土しなかった。

第4層 明黄褐色粘質土（7.5Y R3/1：第Ⅳ層）で、A Iから緩やかに高くなり全域に広がっている。上面の高さはWFでT.P.+3.55m、CLでT.P.+3.15mである。地山である。遺物は出土しなかった。



第147図 中開遺跡6-9区基本土層断面図

遺構

01-O S Y Gの西南部からY Iの西南部まで南南西方向に伸びる、底辺が東北を向いた台形の溝である。南南西側は6-3区の03-O Sに続き、北北東側は調査区外へ伸びる。検出長6.0m、幅4.0~8.0m、深度0.2mを測る。断面形状は口の開いた浅いU字形である。埋土は1層であり、灰黄色砂（2.5Y 7/2）である。遺物は近世以降の陶磁器が出土した。

まとめ

本区で検出した溝は埋土の状況から6-3区の溝と同一のものと思われる。6-3区での状況と比して、幅は広がり、深さも増すが、その肩部は明瞭さを無くし、なだらかである。溝底部の標高をみると、本区が6-3区より0.20m高い。よってこの溝は南流するものと思われる。他、狭小な調査面積であったことから、諸様相を明らかにするには到らなかった。6-3区西端の状況と著しく異なるものではない。

6-43区（付図9・図版52・60）

D地区の中央部で6-4区の西に隣接している。調査直前は大阪陶業（株）の社員寮であった。標高はVWでT.P.+5.00mである。調査区の形状は底辺が西南を向いた多角形である。調査面積は約1,380㎡である。

調査により確認した土層は基本的に3層あるが、遺物は出土しなかった。遺構の検出面は1面で、第3層上面で溝を検出した。

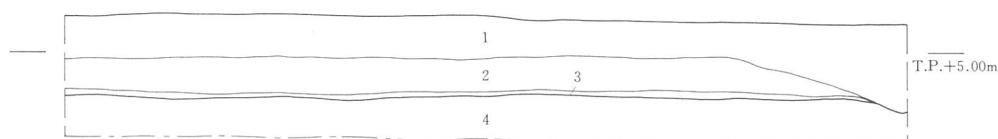
層序（第148図）

第1層 褐色土（灰色土・黄色土混じり：第Ⅱ層）で、全域に広がっている。上面の高さはVWでT.P.+5.00m、RDでT.P.+4.60mである。層厚はVWで0.7mを測る。

現代の盛土である。遺物は出土しなかった。

第2層 黒褐色土 (2.5Y R3/1: 第X層) で、部分的に薄く堆積している。上面の高さはURでT.P.+4.10m、REでT.P.+3.95mである。層厚は0.05mを測る。遺物は出土しなかった。

第3層 黄色粘土 (2.5Y8/6: 第IV層) で、北西方向に傾斜し全域に広がっている。上面の高さはVWでT.P.+4.30m、REでT.P.+3.90mである。地山である。遺物は出土しなかった。



第148図 中開遺跡6-43区基本土層断面図

遺構

01-O S 社員寮の鉄筋コンクリート建物より約6.5m離れて東西に走る溝である。検出長38.0m、幅0.5m、深度0.1~0.15mを測る。埋土は黒褐色土 (2.5Y3/1) である。遺物の出土はなく、時期は不明であるが、コンクリート建物と全く平行しており、この建物と関連のある溝と考えられる。

02-O S 01-O Sより南に9m程離れて所在する。東西に走り、東端で北に屈曲する。検出長12.0m、幅1.5m、深度0.1mを測る。埋土は01-O Sと同様黒褐色土 (2.5Y3/1) である。遺物の出土はなく、時期は不明であるが、埋土の状況から、01-O Sと同時期と考えられる。

まとめ

検出された遺構は、近年のものと考えられるものである。それより古い遺構はなかった。

6-14区 (付図9・図版52・61)

D地区の西北辺の中央部で6-3区の西南に当たる。調査直前は大阪陶業(株)の駐車場であった。標高はEBでT.P.+3.85m、IXでT.P.+3.80mである。調査区の形状は底辺が東北を向いた台形である。調査面積は1,170㎡である。

調査により確認した土層は基本的に5層あり、第3層で近世の、第4層で中世の遺物が出土した。遺構は検出しなかった。

層序（第149図）

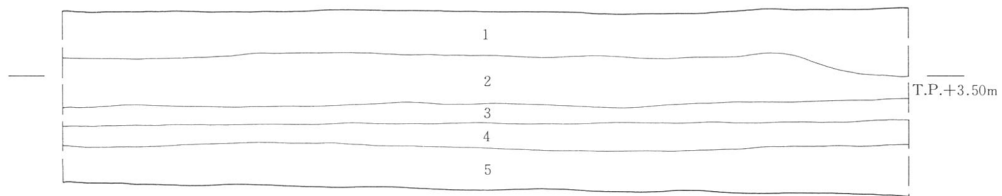
第1層 褐色土（灰色土・黄色土混じり：第II層）で、全域にほぼ水平堆積している。上面の高さはE BでT.P.+3.95m、I XでT.P.+3.85mである。層厚はE Bで0.35m、I Xで0.25mを測る。現代の盛土である。遺物は出土しなかった。

第2層 褐灰色粘土（7.5Y R5/1：第III-a層）で、全域に水平堆積している。上面の高さはT.P.+3.60mである。層厚は0.3mを測る。耕作土である。遺物は出土しなかった。

第3層 にぶい黄橙色粘質砂（10Y R6/4：第VIII層）で、西半部に水平堆積している。東半部では見られない。上面の高さはT.P.+3.30mである。層厚は0.1mを測る。遺物は土師器、近世の陶磁器・瓦、紡錘形の土錘等が出土した。

第4層 褐灰色砂質土（10Y R5/1：第X層）で、西半部に水平堆積している。東半部では見られない。上面の高さはT.P.+3.20mである。層厚は0.1mを測る。遺物包含層である。遺物は中世の瓦器椀・土師器・陶磁器・須恵質甕・蛸壺が出土した。

第5層 灰黄褐色粘質砂（10Y R6/2：第XI層）で、全域に水平堆積している。上面の高さはT.P.+3.10mである。地山である。遺物は出土しなかった。



第149図 中開遺跡6-14区基本土層断面図

遺構

調査区東端部で、現代の井戸があったが、攪乱として扱った。

まとめ

中世遺物包含層に伴う遺構は見当たらなかった。現代より古い遺構は無かった。

6-17区（付図9・図版52・61）

D地区の西北辺で6-14区の南西に当たる。調査直前は大阪陶業（株）の駐車場であった。標高はMVでT.P.+3.80m、I XでT.P.+4.00mである。調査区の形状は長辺の一边が東北を向いた長方形である。調査面積は約610㎡である。

調査により確認した土層は基本的に5層あり、第4層で中世～近世の遺物が出土した。

遺構の検出面は1面で、第5層上面で井戸を検出した。

層序（第150図）

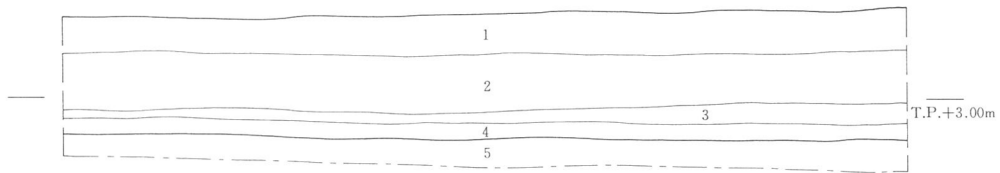
第1層 褐色土（灰色土・黄色土混じり：第II層）で、全域にはほぼ水平堆積している。層厚はI Xで0.8mを測る。現代の盛土である。遺物は出土しなかった。

第2層 黒色土（10Y R2/1：第III-a層）で、全域に水平堆積している。上面の高さはT.P.+3.20mである。層厚はI Xで0.2mを測る。耕作土である。遺物は出土しなかった。

第3層 にぶい黄橙色粘質砂（10Y R6/4：第VIII層）で、全域に水平堆積している。上面の高さはMVでT.P.+2.95m、I XでT.P.+3.00mである。層厚はI Xで0.1mを測る。遺物は出土しなかった。

第4層 褐灰色砂質土（10Y R5/1：第X層）で、北西半部に水平堆積している。南東半部では見られない。上面の高さはMVでT.P.+2.85m、I XでT.P.+2.90mである。層厚は0.1mを測る。遺物包含層である。遺物は瓦器、土師器が出土した。

第5層 灰黄色粘質砂（10Y R6/2：第XI層）で、全域にはほぼ水平堆積している。上面の高さはMVでT.P.+2.70m、I XでT.P.+2.80mである。地山である。遺物は出土しなかった。



第150図 中開遺跡6-17区基本土層断面図

遺構

01-OW 調査区の南西辺中央にほとんど接して所在する。径1.5m、深度0.9mの素掘りの井戸である。埋土が暗灰色のヘドロ状のもので、当初現耕作土に伴う井戸と見て、遺構掘削した。しかし、11世紀と考えられる瓦器碗片が出土し、他に新しい時期の遺物はなく、この井戸が当時のものである可能性と考えることができるものである。

まとめ

この調査区は6-14区と同様、中世の包含層が見られ、集落跡があるものと思われたが、注意して精査したにもかかわらず、柱穴は一切見られず、集落跡をうかがわせるものは、01-OWのみであった。

6-27区（付図9・図版52・61）

D地区の西北辺の中央部で6-17区の西南に隣接している。調査直前は大阪陶業（株）の駐車場であった。標高はT.P.+3.40mである。調査区の形状は底辺を東北に向けた三角形である。調査面積は約130㎡である。

調査により確認した土層は基本的に6層あるが、遺物は出土しなかった。遺構の検出面は1面で、第6層上面で段を検出した。

層序（第151図）

第1層 褐色土（灰色土・黄色土混じり：第II層）で、全域に広がっている。層厚は0.35mを測る。現代の盛土である。遺物は出土しなかった。

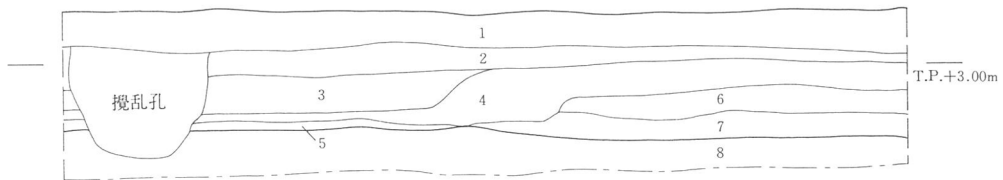
第2層 明黄褐色土（2.5Y6/6：灰色土混じり：第II層）で、全域に広がっている。上面の高さはT.P.+3.04mである。層厚は0.05mを測る。整地土である。遺物は出土しなかった。

第3層 灰色土（5Y4/1：第III-a層）で、全域に広がっている。上面の高さはT.P.+2.98mである。層厚は0.15mを測る。旧耕作土である。遺物は出土しなかった。

第4層 黒褐色粘土（10YR2/2：第X層）で、NVからPUに部分堆積している。上面の高さはT.P.+2.84mである。層厚は0.15mを測る。遺物包含層である。遺物は出土しなかった。

第5層 黄褐色砂（2.5Y5/3：第XI層）で、NVからPUに部分堆積している。上面の高さはT.P.+2.70mである。層厚は0.1mを測る。遺物は出土しなかった。

第6層 明黄褐色粘土（2.5Y6/6：礫混じり：第XI層）で、全域に広がっている。上面の高さはT.P.+2.58mである。地山である。遺物は出土しなかった。



第151図 中開遺跡6-27区基本土層断面図

遺構

01-OZ QAの西部からOVの東部まで湾曲しながら伸びる第6層を削り込んだ段である。方向は西北西から東南東である。北北東側が低くなっており、高低差は0.2mである。段の上面はT.P.+2.95mとT.P.+3.15mで、割合平坦である。下面はT.P.+2.75

mとT.P.+2.90mで、同じく平坦である。

まとめ

段を検出しただけである。この段は調査区東北辺に沿って現在の水路があり、その前身水路の肩部であったと考えられるが、時期等は不明である。

6-D地区のまとめ

11世紀の黒色土器を出土した井戸（6-17区01-O W）と15世紀の陶器・蛸壺を出土した落ち込み（6-10区14-O R）が時期の明確な遺構である。6-3区北端では14世紀以降の遺物を多量に出土した。しかし、流されて堆積したものであり、遺構を伴わない。古代末から中世の遺構が僅かではあるが存在しており、本来的には周辺にこの時期及びさらに遡る時期の集落等が存在していたと考えられる。この他には水田等の耕作に伴う溝や鋤溝が存在する程度で、その時期も近世後半以降と考えるのが適当であろう。

3. 中開遺跡のまとめ

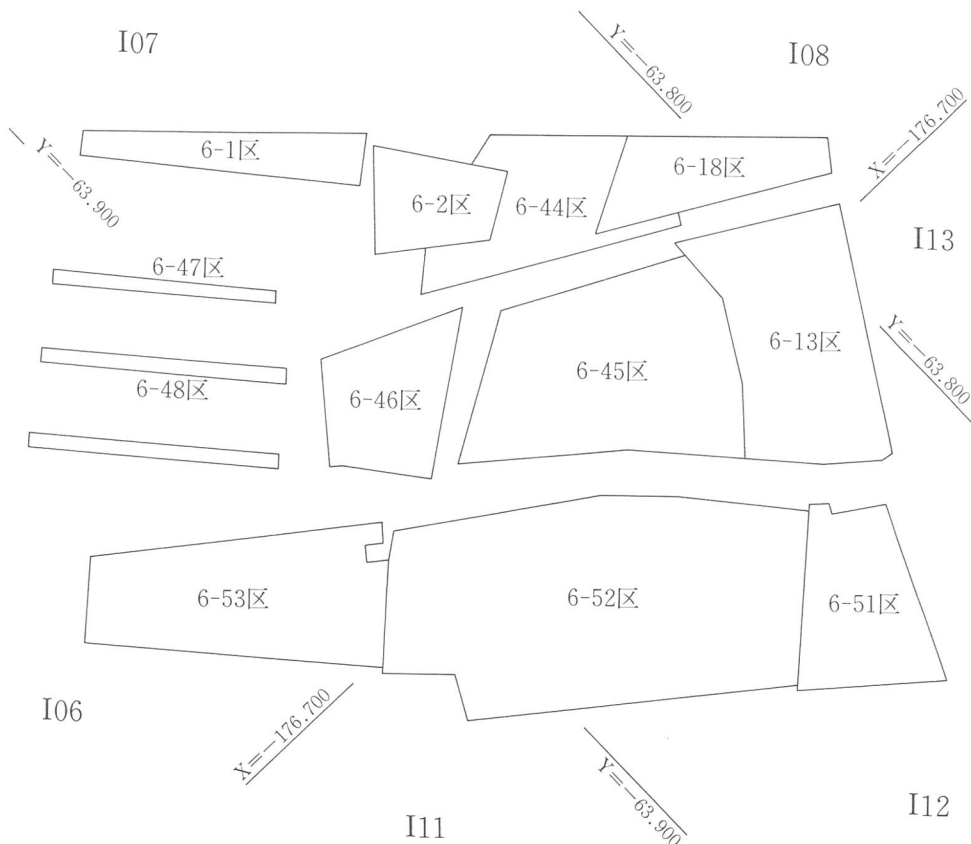
遺跡は海岸段丘から後背湿地を越えた、海岸に向かって緩やかに傾斜している斜面上に位置しており、斜面下半部で古代末から中世の遺構が確認された。井戸と長方形の落ち込みであり、住居跡等は確認できなかった。しかし、井戸は住居から遠く離れた所には余り存在しないことから、周辺に集落が存在していたと考えられるが、後世の人為的及び自然的削平を受け消失してしまった可能性もある。今後、海岸線に平行に調査を拡大して行けば集落跡を検出できる可能性は十分にある。集落といっても余り大規模なものではなく、小規模なものと考えられる。また、石鏃等の遺物が出土しており、さらに古い弥生時代等の遺構も本来的には存在していたようである。ところが上半部では古い時期の遺構は全く検出できず、その痕跡すら確認できなかった。部分的に各時期の小集落の存在した可能性はあるが、全域が人為的に利用されるようになったのは水田として開発されたのが最初であろう。ほぼ全面に現在の水田地割りと多少異なった地割りが確認できる。これらの地割りの時期は明確ではないが、調査をしていて出土遺物や堆積土層を観察した感触では近世でも後半以降ではないかと思われる。

第4節 松原遺跡の調査

当遺跡は市道本町羽倉崎線と現汀線とに挟まれた範囲である。その中央に東南から西北に約120mの幅で6-E地区として調査を行った。

1. 6-E地区の調査

調査面積は約21,000㎡である。調査用の地区割りでは、大C-3-9-I07・08・12・13の交点が東隅部に、I06・07・11・12の交点が調査地区西南辺中央部にあたる。調査地区は用水路と農道により3分された。用水路の東北側は住宅・工場・空地で6-18・44・2・1・47区に、用水路と農道の間は田畠・工場・倉庫で6-13・45・46・48区に、農道より西南側は工場で6-51・52・53区に細分して調査した。



第152図 松原遺跡 6-E地区調査区配置図

6-18区（付図10・図版62・63）

E地区の東隅部で、東南辺は本町羽倉崎線に面している。調査直前は田畠であった。標高はV EでT.P.+4.45m、P XでT.P.+4.50mである。調査区の形状は底辺が東北を向いた多角形である。調査面積は約460m²である。

調査により確認した土層は基本的に7層あり、第4層で弥生時代から中世の遺物が出土した。遺構の検出面は2面で、第5層上面では遺構はなく、第7層上面で谷状の落ち込みを検出した。

層序（第153図）

第1層 褐色土（灰色土・黄色土混じり：第II層）で、全域に水平堆積している。層厚はV Eで0.55m、P Xで0.6mを測る。現代の盛土である。遺物は出土しなかった。

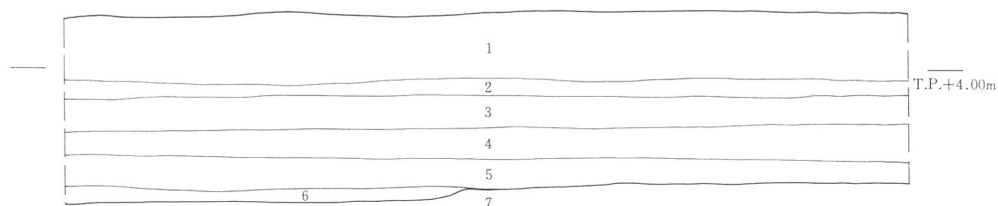
第2層 黒色土（10Y R2/1：第III-a層）で、全域に水平堆積している。上面の高さはT.P.+3.90mである。層厚はV Eで0.15m、P Xで0.1mを測る。耕作土である。遺物は出土しなかった。

第3層 灰黄色砂（2.5Y 7/2：第VIII層）で、全域に水平堆積している。上面の高さはV EでT.P.+3.75m、P XでT.P.+3.80mである。層厚はV Eで0.25m、P Xで0.35mを測る。遺物は出土しなかった。

第4層 黒褐色土（2.5Y 3/1：第X層）で、北西方向に緩やかに下がり、全域に広がっている。上面の高さはV EでT.P.+3.50m、P XでT.P.+3.45mである。層厚はP Xで0.35mを測る。遺物包含層である。遺物は弥生時代の壺・甕、古墳時代の土師器・須恵器、中世の青磁・瓦器・土師器・須恵質ねり鉢・土師小皿・瓦等（図版64・65）が出土した。

第5層 灰白色砂（2.5Y 7/1：第XI層）で、北西方向に厚くなり、UCから北西方向に広がっている。上面の高さはT.P.+3.10mである。層厚はP Xで0.3mを測る。いわゆる遺物は出土しなかったが、木片など植物遺体が出土した。

第6層 暗緑灰色土（7.5G Y 4/1：礫・砂混じり：第XII層）で、北西方向に傾斜して



第153図 松原遺跡6-18区基本土層断面図

堆積しており、R Yから北西方向に広がっている。上面の高さはR YでT.P.+3.30m、P XでT.P.+2.80mである。層厚は0.3mを測る。遺物は出土しなかった。

第7層 緑灰色礫（10G Y6/1：第Ⅶ層）で、北西方向に傾斜して堆積しており全域に広がっている。上面の高さはV EでT.P.+3.30m、R YでT.P.+3.00m、P XでT.P.+1.60mである。段丘礫層である。遺物は出土しなかった。

遺構

第4層の中世包含層を除去した面で、精査したが遺構は見当たらなかった。

まとめ

3、5、6層の状況より、この調査区全体が谷状地形内にあるものと考えられ、その微地形に砂層が堆積する途中のある段階で、中世包含層が形成されたものと考えられる。

6-44区（付図10・図版62・66）

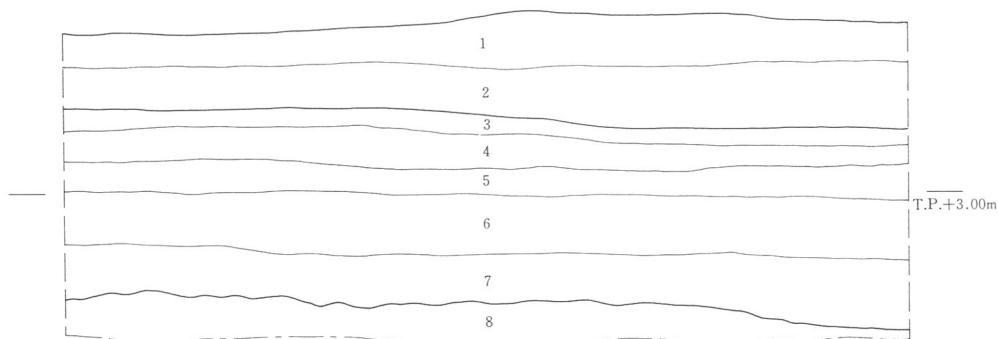
E地区の東北辺に接し、18区の北に当たる。調査直前は三和オートという自動車修理工場であった。標高はP WでT.P.+3.75m、J QでT.P.+3.90mである。調査区の形状は底辺が北西を向いた多角形である。調査面積は約930㎡である。

調査により確認した土層は基本的に11層あり、第4層で中世の遺物が出土した。遺構の検出面は3面で、第4層上面で溝、流路、石組を、第10層上面でカニ穴を検出した。

層序（第154図）

第1層 褐色土（灰色土・黄色土混じり：第Ⅱ層）で、全域に広がっている。層厚は0.1mを測る。現代の盛土である。遺物は出土しなかった。

第2層 黒褐色土（10Y R3/2：第Ⅲ-a層）で、全域に広がっている。上面の高さ



第154図 松原遺跡6-44区基本土層断面図

はPWでT.P.+3.65m、JQでT.P.+3.80mである。層厚はPWで0.05m、JQで0.1mを測る。耕作土である。遺物は出土しなかった。

第3層 明黄褐色細砂 (2.5Y6/6：明黄褐色砂 (10YR6/8) 混じり：第Ⅷ層) で、全域にはほぼ水平堆積している。上面の高さはPWでT.P.+3.60m、JQでT.P.+3.70mである。層厚はPWで0.2m、JQで0.25mを測る。遺物は出土しなかった。

第4層 黒褐色土 (2.5Y3/1：砂混じり：第Ⅹ層) で、全域にはほぼ水平堆積している。上面の高さはPWでT.P.+3.40m、JQでT.P.+3.45mである。層厚はPWで0.2mを測る。いわゆる遺物包含層である。遺物は瓦器がもっとも多く、須恵器・土師器・弥生土器も少量出土した。

第5層 にぶい褐色細砂 (7.5YR3/1：第Ⅺ層) で、OV、RU、SVから東側に広がりほぼ水平堆積している。上面の高さはPWでT.P.+3.20mである。層厚はPWで0.2mを測る。遺物は出土しなかった。

第6層 褐灰色粘土 (7.5YR4/1：細砂混じり：第Ⅺ層) で、北西方向に向かって高くなり全域に広がっている。上面の高さはPWでT.P.+3.00m、JQでT.P.+3.35mである。層厚はPWで0.1m、JQで0.15mを測る。遺物は出土しなかった。

第7層 暗緑灰色粗砂 (10GY4/1：植物遺体混じり：第Ⅻ層) で、北西方向に向かって高くなり全域に広がっている。上面の高さはPWでT.P.+2.90m、JQでT.P.+3.20mである。層厚はJQで0.2mを測る。遺物は出土しなかった。

第8層 暗緑灰色砂 (10GY4/1：小石・植物遺体混じり：第Ⅻ層) で、北西方向に向かって高くなりほぼ全域に広がっている。上面の高さはOVでT.P.+2.80m、JQでT.P.+3.00mである。層厚はJQで0.2mを測る。遺物は出土しなかった。

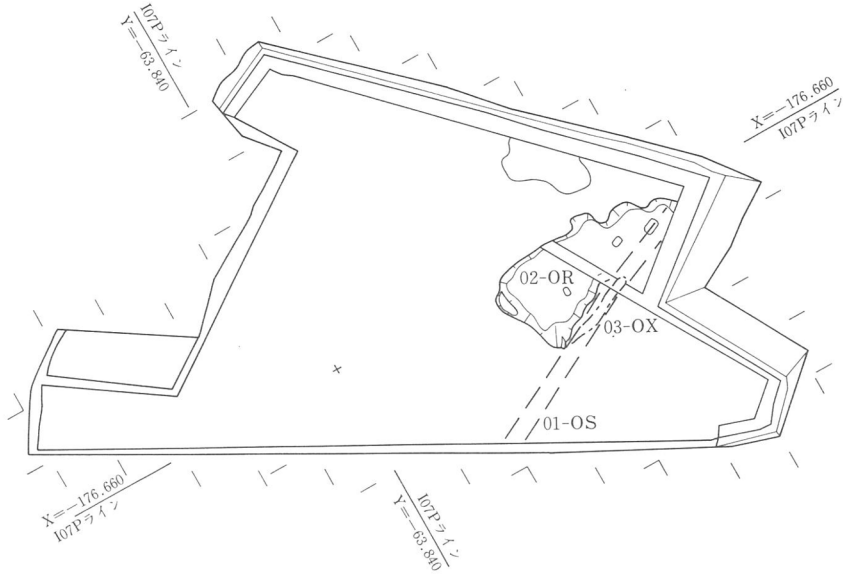
第9層 暗緑灰色泥土 (10GY4/1：礫混じり：第Ⅻ層) で、北西方向に向かって高くなり全域に広がっている。上面の高さはPWでT.P.+2.50m、JQでT.P.+2.80mである。層厚はJQで0.2mを測る。遺物は出土しなかった。

第10層 灰白色粘土 (10Y7/2：第Ⅻ層) で、上面は凹凸が激しく部分的に広がっている。上面の高さはPTでT.P.+2.30mである。層厚はPTで0.2m以上を測る。地山である。遺物は出土しなかった。

第11層 灰白色粘土混礫 (10Y7/2：第Ⅻ層) で、上面は凹凸が激しく全域に広がっている。上面の高さはPWでT.P.+2.20m、JQでT.P.+2.50mである。段丘礫層である。遺物は出土しなかった。

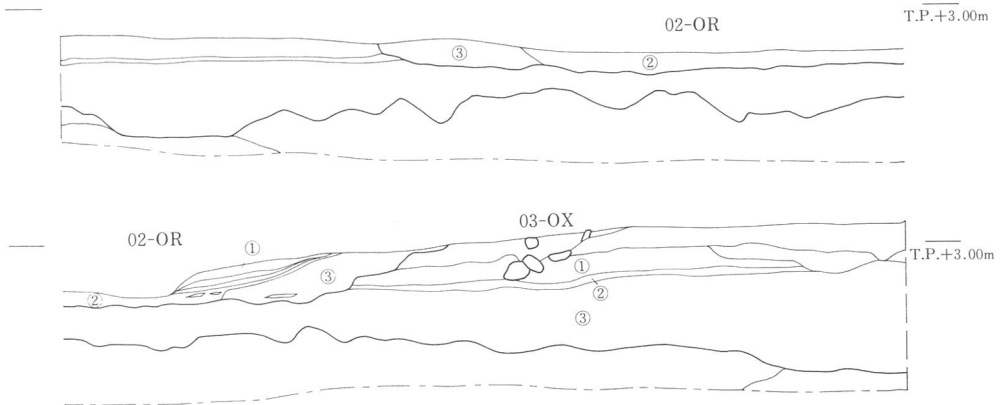
遺構

第1遺構面



第155図 松原遺跡6-44区第1遺構面平面図

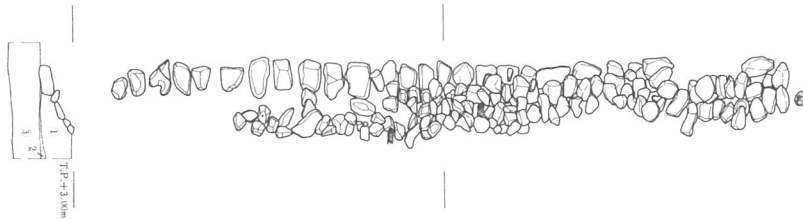
01-OS (図版66) OVからQTの中央部を通してRRの中央部まで西南西方向に伸びる、杭列が残る溝である。西南西端は6-45区の03-OSに続く。検出長22.0mを測るが、平面では検出しておらず、幅、深度、断面形状は不明である。埋土も不明である。遺物は出土しなかった。



第156図 松原遺跡6-44区02-OR・03-OX埋土断面図

02-O R (第156図・図版66) P Vの西北部からQ Uの西北部までで検出した流路である。検出面での平面形状は屈曲した楕円形であり、O Q・P R・P S付近で途切れるが、西南方向は6-45区の08-O Rに続く。東側は調査区外へ伸びる。長さ12.5m、幅4.0～5.5m、深度0.25mを測る。断面形状は口の開いた浅いU字形である。埋土は3層で、①灰白色砂(10 Y 7/1)、②灰色粘土(7.5 Y 4/1:灰色砂・微砂混じり)、③淡灰色砂(10 Y 6/0)である。遺物は①灰色砂から近世の染め付け片が出土した。

03-O X (第156・157図・図版66) Q Uの西北部からQ Sの中央部で検出した西南西方向に直線的に伸びる石組である。検出長6.0m、検出幅0.6mを測る。最下部(暗緑灰色砂(10 G Y 4/1))上に大きめの石を1列に並べ、順次石を積み上げている。石組み上部から下部にかけて接する土層は①暗緑灰色砂(10 G Y 4/1)、②暗緑灰色砂(10 G Y 3/1:植物遺体が多量に含まれる)、③暗緑灰色砂(10 G Y 4/1:小石、植物遺体、泥土を含む)である。遺物は出土しなかった。



第157図 松原遺跡 6-44区03-O X平面図

まとめ

第4層(中世遺物包含層:第X層)中より弥生土器、土師器、須恵器、瓦器等の細片が出土しているが、遺構の検出はない。同層の堆積状況を観察すると、砂混じりの粘土と砂との互層をなす部分も認めうる。6-51区のような乾痕は認められない。下位の土層には植物遺体が認められるが、貝殻は一切認められない。

03-O Xの構築時期は、層位的に観て第X層形成以前である。

02-O Rの方向性や第VIII層の広がり方を考えると、当該地は第III-a層形成まで不安定な立地環境にあったと考えられる。

6-2区(付図10・図版62・67)

E地区の東北辺で6-44区の西北に当たる。調査直前は東洋工業社員寮跡地であった。標高はL QでT.P.+4.10m、G MでT.P.+3.85mである。調査区の形状は底辺が西北を

向いた台形である。調査面積は約540㎡である。

調査により確認した土層は基本的に5層あるが、遺物は出土しなかった。遺構も検出なかった。

層序（第158図）

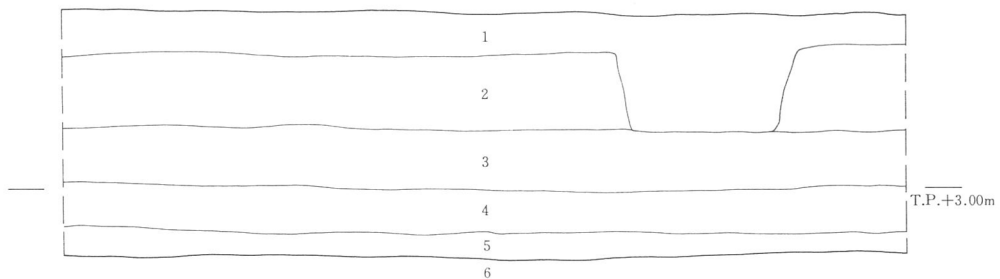
第1層 褐色土（灰色土・黄色土混じり：第II層）で、北西方向に低くなり全域に広がっている。層厚は0.25mを測る。現代の盛土である。遺物は出土しなかった。

第2層 褐色砂（7.5Y R4/4：第VIII層）下部は黄灰色砂（2.5Y5/1）・褐色砂（7.5Y R4/3）で、北西方向に低くなり全域に広がっている。上面の高さはLQでT.P.+3.85m、GMでT.P.+3.60mである。層厚はLQで0.5m、GMで0.75mを測る。遺物は出土しなかった。

第3層 褐灰色砂（7.5Y R4/2：第XI層）で、HMを境にして斜めに堆積し、全域に広がっている。上面の高さはLQでT.P.+3.35m、GMでT.P.+2.85mである。層厚はLQで0.55m、GMで0.25mを測る。遺物は出土しなかった。

第4層 褐灰色砂（5B3/1：第XII層）で全域に広がっている。下部は暗青灰色砂（10Y R5/1）・暗青灰色細砂礫（5B3/1）で、GMで途絶る。上面の高さはLQでT.P.+2.80m、GMでT.P.+2.60mである。層厚はLQで0.25mを測る。遺物は出土しなかった。

第5層 緑灰色粘土（5G6/1：第XIV層）で、北西方向に少し高くなり、全域に広がっている。上面の高さはLQでT.P.+2.55m、GMでT.P.+2.60mである。地山である。遺物は出土しなかった。



第158図 松原遺跡6-2区基本土層断面図

まとめ

6-01区で見られた1960年代の所産と思われるテトラポットやコンクリート製杭の出土や、社員寮の建物基礎は本区には及んではいなかったが、小型の建築部材や廃油の入ったドラム缶等が投棄されており、その攪乱は地山まで及んでいた。1区共々、高度経済成長

期以降の分別のない開発の有り様が露呈したものと解される。ただ、第5層の上面には第4層を埋土とする径、深度とも10～20cmの不定形の窪みが多く見られた。カニ穴と思われる。

6-1区（付図10、図版62・67）

E地区の北隅に位置し、道路予定地の最も海寄りである。調査直前は東洋工業社員寮跡地であった。標高はFMでT.P.+3.90m、UCでT.P.+3.60mである。調査区の形状は底辺が北西を向いた台形である。調査面積は約650㎡である。調査区はL字形を呈する対象地の西半、北辺に設定した。東半については6-2区として別途調査した。調査区が対象地全面に及ばなかったのは、建物基礎撤去に際し、北接する住宅地との間に騒音、振動、粉塵等の問題が生じ、建物基礎が残る箇所について掘削を保留したことによる。また測量は、ヘリコプターによる航空測量の場合、住宅地へ及ぼす騒音や埃を考慮し、クレーン測量を実施することとした。そのためクレーン車稼動用地を確保したことも調査面積縮小の理由の一つである。

調査により確認した土層は4層で、第2層から古墳時代と江戸時代の遺物が出土した。遺構は検出しなかった。

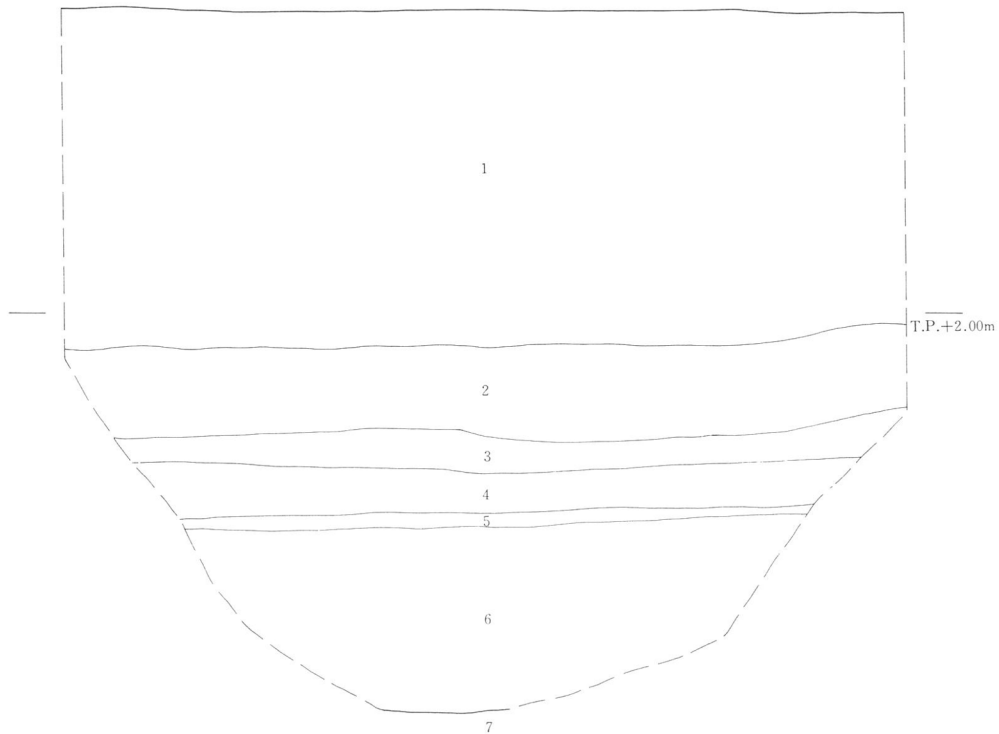
層序（第159図）

第1層 褐色土（灰色土・黄色土混じり：第II層）で、北西方向に向かって厚くなり、全域に広がっている。層厚はFMで0.5m、UCで1.7mを測る。現代の盛土である。遺物は出土しなかった。

第2層 にぶい黄褐色砂（10YR5/3：第VIII層）で、BI～UCにかけて厚く起伏があり、DK～BI間で途切れる。上面の高さはFMでT.P.+3.40m、DKでT.P.+1.60m、UCでT.P.+1.90mである。層厚はFMで0.8m、UCで0.7mを測る。遺物は須恵器・飯蛸壺・寛永通宝が出土した。

第3層 緑灰色砂（7.5GY6/1：第XI層）で、WEから北西に厚く斜めに堆積し、全域に広がっている。上面の高さはFMでT.P.+2.60m、UCでT.P.+1.20mである。層厚はFMで0.2m、UCで1.3mを測る。遺物は出土しなかった。

第4層 緑灰色粘土（5G6/1：礫混じり：第XIV層）で、XEで傾斜が急勾配し、全域に広がっている。上面の高さはFMでT.P.+2.40m、XEでT.P.+0.60m、UCでT.P.-0.10mである。地山である。遺物は出土しなかった。



第159図 松原遺跡6-1区基本土層断面図

まとめ

最上層である第2層以下地山にかけて、1960年代の所産と思われるテトラポットやコンクリート製杭が多量に混じる。それらを廃棄する際に穿たれた攪乱土壌の多くが地山まで達する。コンクリート製建築部材については頑丈な構造であることから分割、撤去が不可能でやむなく調査区内に残したものもある。地元民からの聞き取りによると社員寮以前には造船所が、戦時中には製塩工場があったとのことであり、本対象地は幾度となく造成、整地が繰り返されていたようである。

6-47区（付図10・図版62・75）

E地区の西北辺の中央部で1区の西南に隣接している。調査直前は小間安組井原建設工業の資材置場であった。標高はTEでT.P.+3.71m、YVでT.P.+2.97mである。周辺の調査結果とその他の理由から、当地区の調査は幅2.0~3.0m、長さ37.0mのトレンチで行った。調査面積は約100㎡である。

調査により確認した土層は2層であり、遺物は出土しなかった。遺構も検出しなかった。

層序

地山は、灰白色粘土～黄褐色礫土である。地山面のレベルはトレンチの陸側端でT.P. +2.30m、中央部でT.P. +1.90mとなる。海側にいくと更に深くなるが、危険なため、地山面までは掘削できなかった。地山面から現地表面までは、すべて現代の盛土であり、レンガ片、コンクリート塊などの産業廃棄物も多かった。現在の防潮堤建設時に、その内陸側を埋め立てたものと考えられる。

遺構

海に向かって落ちていく地山面を検出したのみで、遺構は見当たらなかった。

まとめ

このトレンチ調査の結果、6-47区は全面的な調査は必要でないこととなった。

6-13区（付図10・図版62・68）

E地区の東南辺の中央部で稲倉2号用水路を挟んで6-18区の南に当たる。調査直前は水田であった。標高はT.P. +3.50mである。調査区の形状は底辺を東南に向けた多角形である。調査面積は約1,230㎡である。

調査により確認した土層は基本的に5層あり、第1層で現代の、第3層で弥生時代～中世の遺物（図版69・70）が出土した。遺構の検出面は2面で、第3層上面で流路を、第5層上面で谷を検出した。

層序（第160図）

第1層 黒色土（10Y R2/1：第Ⅲ-a層）で、全域に水平堆積している。層厚はF Qで0.2mを測る。耕作土である。遺物は現代の紡錘形の土錘が出土した。

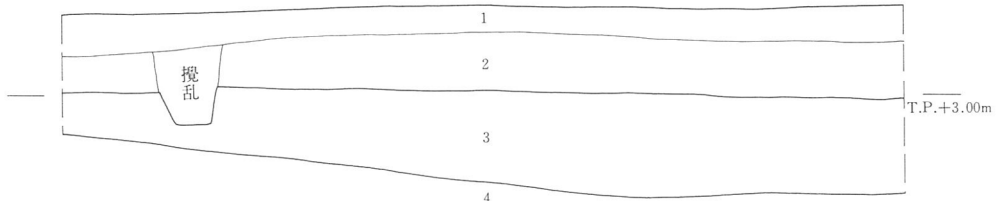
第2層 黄灰色細砂（2.5Y 6/1：第Ⅷ層）で、北西方向に斜めに堆積しており、H S～F Qの間に広がっている。上面の高さはT.P. +3.30mである。層厚はF Qで0.7mを測る。遺物は出土しなかった。

第3層 紫灰色粘土（5R P6/1：第Ⅹ層）で、北西方向に僅かに傾斜しており、H Sで第2層に切られる。上面の高さはT.P. +3.30mである。層厚はJ Uで0.2mを測る。弥生時代～中世までの遺物包含層である。遺物は壺、甕、蛤壺、土師器、瓦器碗、瓦質甕、須恵質ねり鉢、青磁、瓦等（図版69・70）が出土した。

第4層 黄灰色細砂（2.5Y 6/1：第Ⅺ層）で、北西方向に僅かに傾斜し、H Sで斜めに堆積しており全域に広がっている。上面の高さはJ UでT.P. +3.10m、F QでT.P. +

2.60mである。層厚はJ Uで0.3m、F Qで0.1mを測る。遺物は出土しなかった。

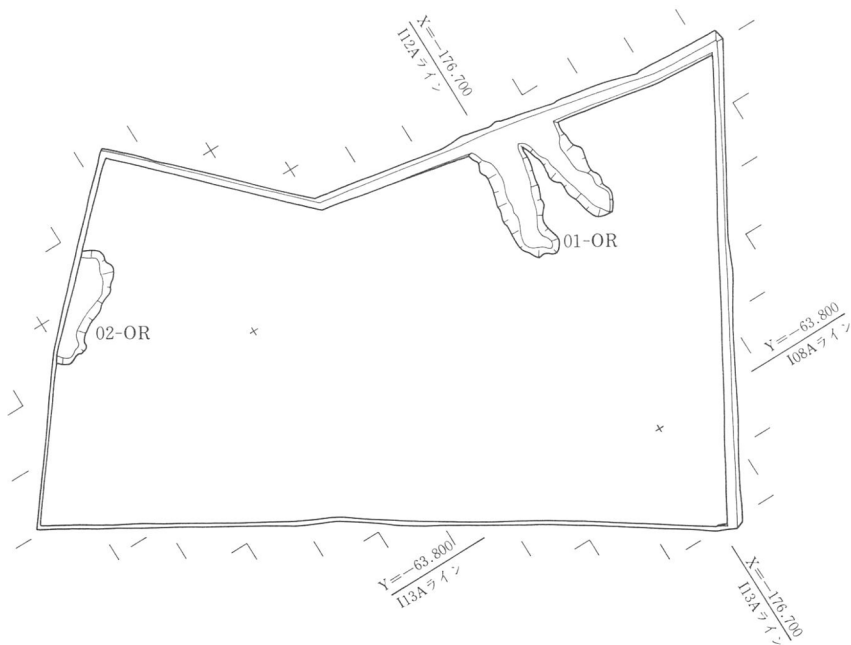
第5層 明黄褐色粘土（10Y R6/6：第Ⅳ層）で、北西方向に傾斜しており全域に広がっている。上面の高さはJ UでT.P.+2.80m、F QでT.P.+2.50mである。地山である。遺物は出土しなかった。



第160図 松原遺跡6-13区基本土層断面図

遺構

第1遺構面（第161図・図版68）



第161図 松原遺跡6-13区第1遺構面平面図

01-OR XV・AVよりYTに向かうそれぞれ2条の流路である。それぞれ直線的に伸びるがYTで合流し、6-45区の08-ORに接続する。検出長8.0m・9.0m、幅2.5m、深度0.3mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は3層で、①にぶい黄色細砂（2.5

Y6/4)、②にぶい黄色粗砂 (2.5Y6/3)、③暗赤灰色粘土 (2.5Y R3/1) である。遺物は出土しなかった。

02-OR ISの東北部からFQの西部まで東北肩部のみ検出した流路である。蛇行しながら伸びる。検出長14.5m、検出幅1.5m、深度0.2mを測る。断面形状はU字形である。埋土は2層で、大部分はにぶい黄色細砂 (2.5Y6/4) で、肩部に暗赤灰色粘土 (2.5Y R3/1) がブロック状に堆積していた。遺物は出土しなかった。

第2遺構面 (付図10・図版68)

03-OR WUからCXまでで検出した谷である。検出面での平面形状は不定形である。調査区北部に継続する。検出長25.0m、幅15.0m、深度0.2~0.5mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は2層で、上部が灰黒色土 (5G3/0:砂混じり) で下部に0.1m程度灰黒色粘土 (5G3/0:礫及び青灰色粘土混じり) が堆積していた。遺物は出土しなかったが、多量の自然木を含んでいた。

04-OR GSからERまでで東肩部のみ検出した谷である。検出面での平面形状は東肩部が蛇行している。6-45区の08-ORに続く。検出長9.0m、検出幅7.0m、深度0.2mを測る。断面形状は逆台形である。埋土は1層で、灰黒色土 (5G3/0:砂混じり) である。遺物は出土しなかったが、多量の自然木を含んでいた。

まとめ

第2遺構面は谷状の落ち込みを検出しただけであり、人為的なものではなく、あくまで自然のままの状態であったようである。谷の埋土には多量の自然木が含まれていたが、遺物は出土しなかったため、埋没時期は不明である。谷の埋没後に第4層が堆積しているが全く遺物を出土せず、堆積時期は不明である。第3層は弥生時代~中世までの遺物を含んでおり、中世に堆積した土層である。第2層は第1遺構面で検出した流路を覆っていた砂で流路内埋土と似ており、流路の埋没とほとんど同時期に堆積したようである。ただ、流路内からは遺物が出土しなかったため、埋没時期は不明であるが、中世以降ではある。この層の上に床土もなく、現代の水田耕作土が存在していた。

6-45区 (付図10・図版62・71)

E地区の中央部で6-13区の西に隣接している。調査直前は松原サイジングという織物工場であった。標高はFPでT.P.+3.80mである。調査区の形状は底辺を西南に向けた多角形である。調査面積は約1,960㎡である。

調査により確認した土層は基本的に11層あり、第5層で中世の遺物が出土した。遺構の検出面は2面で、第4層上面で井戸、土坑、溝、流路を、第10層上面で流路を検出した。

層序（第162図）

第1層 褐色土（灰色土・黄色土混じり：第II層）で、F P・E Qに広がり、E Qで途絶える。層厚はF Pで0.3mを測る。現代の盛土である。遺物は出土しなかった。

第2層 黒褐色土（10Y R3/1：第III-a層）で、全域に水平堆積している。上面の高さはF PでT.P.+3.50mである。層厚はF Pで0.2mを測る。耕作土である。遺物は出土しなかった。

第3層 灰黄褐色細砂（10Y R6/2：第VIII層）で、全域にはほぼ水平堆積している。上面の高さはF PでT.P.+3.30mである。層厚はF Pで0.1mを測る。遺物は出土しなかった。

第4層 明黄褐色細砂（10Y R6/6：灰白色土系の粗礫・礫混じり：第VIII層下部）で、谷状地形に堆積し、Y S～T Tに広がっている。上面の高さはF PでT.P.+3.20mである。層厚はF Pで0.2m、X Tで0.4m、W Tで0.2mを測る。遺物は出土しなかった。

第5層 黒褐色粘土（7.5Y R3/2：第X層）で、F P～Y Sに広がり水平堆積している。上面の高さはF PでT.P.+3.20mである。層厚はF Pで0.2mを測る。遺物包含層である。遺物は弥生式土器・土師器・須恵器・瓦器が出土した。

第6層 灰褐色粗砂・細砂（7.5Y R6/2：第XI層）で、F P～Y Sに広がりほぼ水平堆積している。上面の高さはF PでT.P.+3.00mである。層厚はF Pで0.2mを測る。遺物は出土しなかった。

第7層 褐灰色粗砂（7.5Y R6/1：小石・上部に植物遺体混じり：第XII層）で、全域に広がっている。上面の高さはF PでT.P.+2.90m、Y SでT.P.+2.70m、V TでT.P.+3.20mである。層厚はF Pで0.4m、Y Sで0.2m、V Tで0.3mを測る。遺物は出土しなかった。

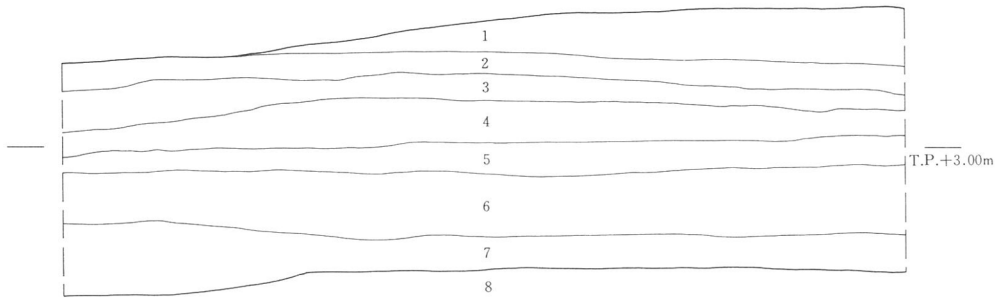
第8層 明黄褐色粗砂（10Y R6/6：第XIII層）で、B S～T Tに広がっている。上面の高さはT.P.+2.80mである。層厚は0.1mを測る。遺物は出土しなかった。

第9層 暗緑灰色・褐灰色泥土（10G Y3/1・7.5Y R5/1：礫混じり：第XIII層下部）で、Y S～T Tに広がっている。上面の高さはT.P.+2.70mである。層厚はY Sで0.1m、T Tで0.3mを測る。遺物は出土しなかった。

第10層 明黄褐色粘土（10Y R6/6：第XIV層）で、全域に広がっている。上面の高さ

はF PでT.P.+2.40m、T TでT.P.+2.50mである。地山である。遺物は出土しなかった。

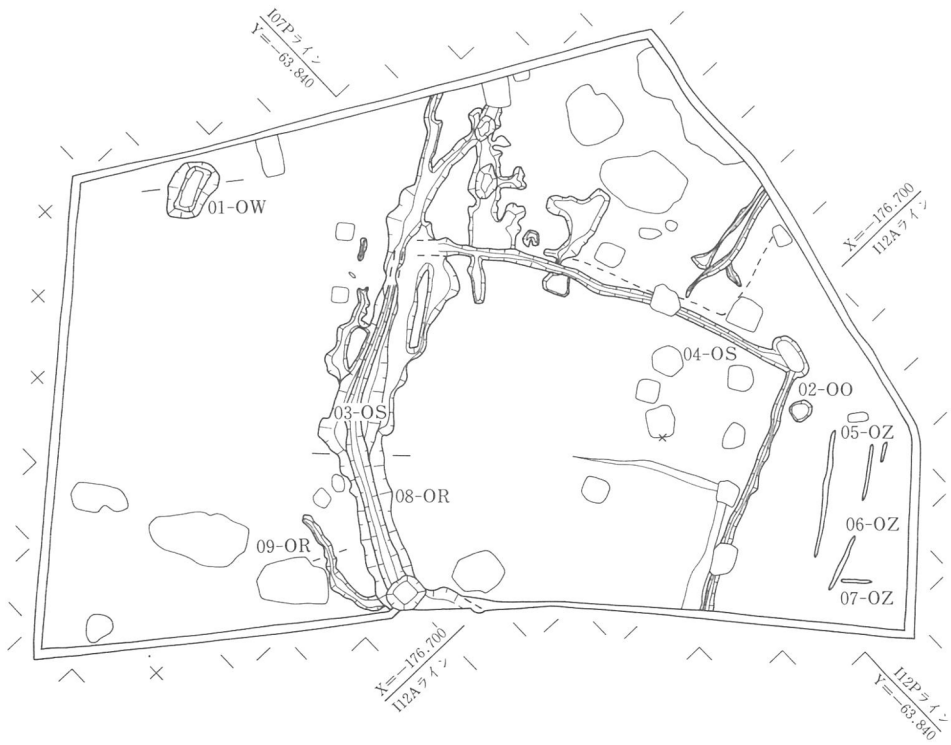
第11層 浅黄色砂礫 (2.5Y7/4: 第Ⅲ層) で、F Pに広がっている。上面の高さはF PでT.P.+2.40mである。段丘礫層である。遺物は出土しなかった。



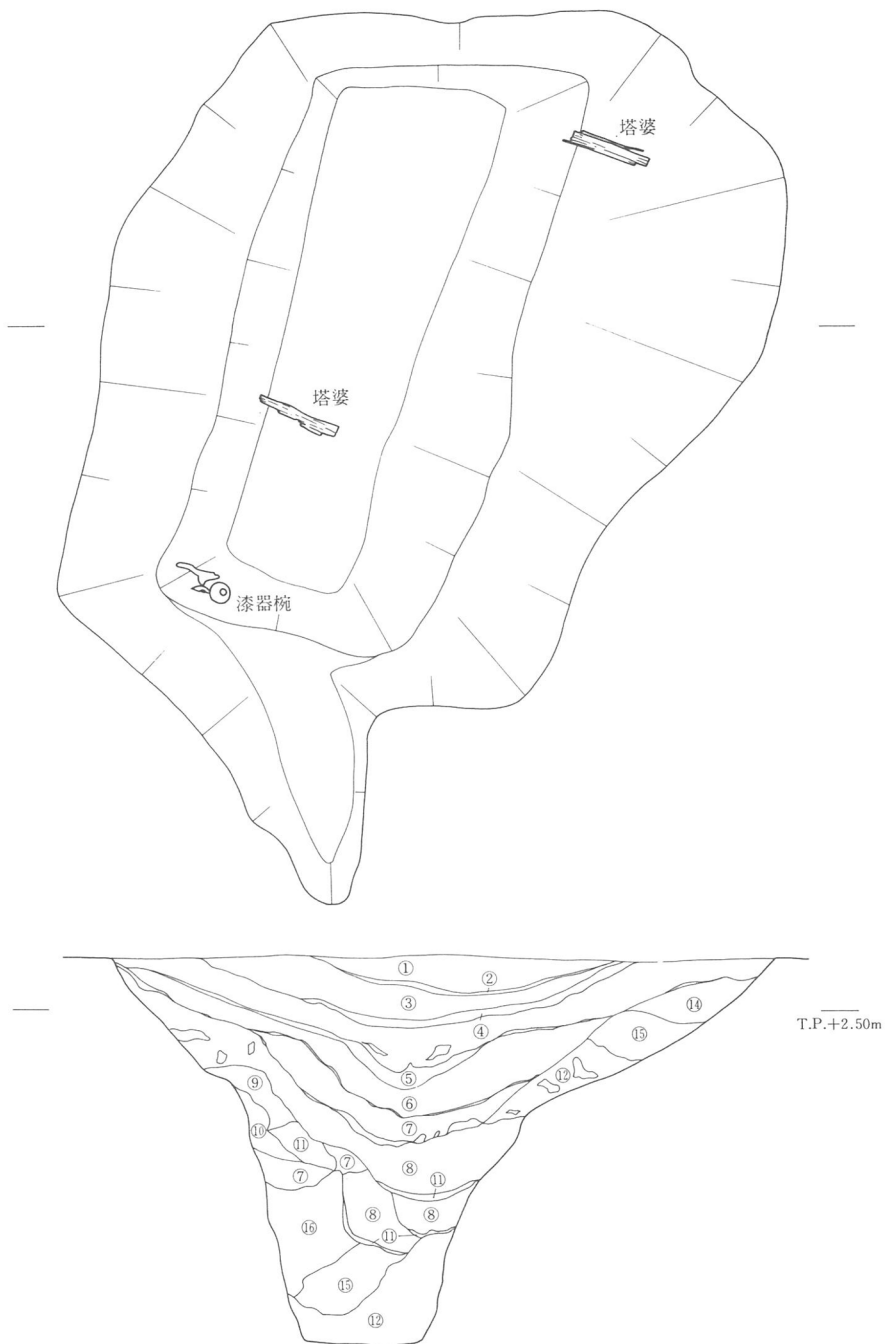
第162図 松原遺跡6-45区基本土層断面図

遺構

第1遺構面 (第163図・図版71)



第163図 松原遺跡6-45区第1遺構面平面図

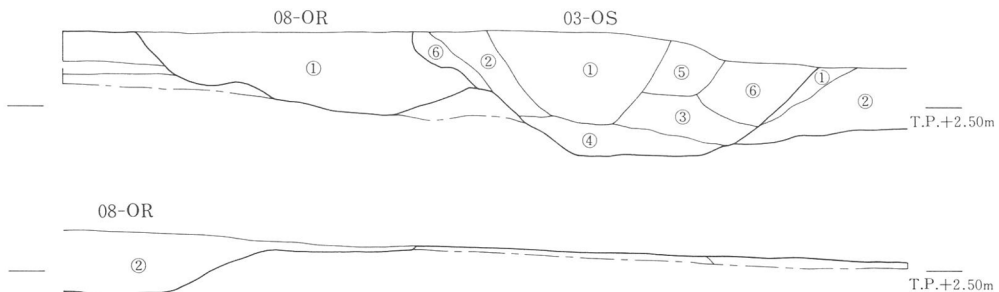


第164图 松原遺跡 6-45区01-O W平面図・埋土断面図

01-OW (第164図・図版72) Q Lの東部からQMの西部で検出した不整楕円形の井戸である。長軸が西南西方向を指す。肩部長径4.0m・短径2.5m、底部長径2.8m・短径0.7m、深度2.1mを測る。断面形状は2段で上部は口の開いた逆台形で下部は逆台形である。埋土は16層で、①灰色砂(10Y R7/1)、②明黄褐色砂(10Y R6/8)、③にぶい黄橙色細砂(10Y R6/3: 泥土混じり)、④灰黄褐色泥砂(10Y R6/2)、⑤黒褐色泥土(10Y R3/1)、⑥褐灰色細砂(10Y R6/1: 泥土混じり)、⑦褐灰色泥砂(10Y R6/1)、⑧褐灰色細砂(10Y R6/1: 砂質包含層ブロック・小石混じり)、⑨黒褐色粗砂(10Y R3/2)、⑩褐灰色粗砂(10Y R6/1)、⑪黒褐色泥土(10Y R3/1: 青灰色粘土混じり)、⑫暗緑灰色泥土(5G3/1: 青灰色粘土混じり)、⑬にぶい黄橙色泥砂(10Y R6/3: 多量の泥土混じり)、⑭にぶい黄橙色細砂(10Y R6/3: 多量の泥土混じり)、⑮にぶい黄橙色粗砂(10Y R6/3: 多量の泥土混じり)、⑯緑灰色細砂(5G6/1)である。断面図では同じ番号の層が何度もでてくるが必ずしも同時期形成によるものではない。遺物は⑧褐灰色細砂から塔婆(図版72)・漆器椀が出土した。

02-OO B Qの東部からBRの西部で検出した円形の土坑である。肩部直径1.45m、底部直径1.4m、深度0.59mを測る。断面形状はU字形である。埋土は1層であり、黒褐色土(10Y R3/1)である。遺物は出土しなかった。

03-OS (第165図・図版74) Y JからUMを通してSQまで東北方向に曲線的に伸びる溝である。東北端は6-44区の01-OS、西南端は6-52区の01-OSに続く。検出長35.0m、幅1.5m、深度0.7mを測る。断面形状は口の開いた浅いU字形である。埋土は6層で、①灰色土(5Y4/1: 礫混じり)、②灰色土(5Y4/1)、③灰白色細砂(10Y R7/1: 粘土混じり)、④灰白色粗砂(10Y R7/1: 礫混じり)、⑤灰色土(5Y6/1)、⑥灰色土(5Y6/1: 粘土混じり)である。08-ORの埋没後に形成されたもので、溝というよりは08-ORの最終段階と考えられる。遺物は出土しなかった。



第165図 松原遺跡 6-45区03-OS・08-OR埋土断面図

04-O S DNからBRを通過してTOまで東北方向に伸び、屈曲して西北方向に伸びる、底辺が東北を向いたL字形の溝である。西北端は03-O Sに続き、西南端は6-52区へ伸びるが、不明である。検出長48.0m、幅0.5m、深度0.19mを測る。断面形状はU字形である。埋土は1層で灰色土(5Y5/1)である。遺物は出土しなかった。

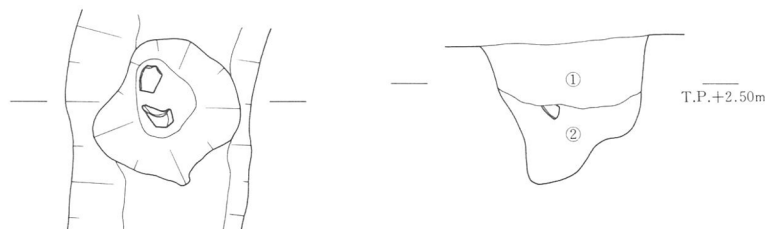
05-O Z DQからERで検出した鋤溝群である。条数は2条あり、西南から東北に伸びている。6-52区の05-O Zに続く。長さ0.5~3.5m、幅0.2m、深度0.05mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、灰色土(5Y5/1)である。遺物は出土しなかった。

06-O Z EPからFPで検出した鋤溝である。条数は1条であり、西南西から東北東に伸びている。長さ1.5m、幅0.1m、深度0.13mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、灰色土(5Y5/1)である。遺物は出土しなかった。

07-O Z FPからFQで検出した鋤溝である。条数は1条であり、東南から西北に伸びている。長さ1.0m、幅0.1m、深度0.05mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、灰色土(5Y6/1)である。遺物は出土しなかった。

08-O R (第165図・図版73) YJからSQで検出した流路である。検出面での平面形状は曲線的に一定しない幅で伸びている。XK付近で03-O Sに切られ、消滅している。検出長38.0m、幅はUKで4.3m、XKで3.0m、深度はUKで0.45m、XKで0.65mを測る。断面形状は口の開いた浅いU字形である。埋土は2層で、①灰色細砂(10YR7/1)、②灰白色細砂：粘土混じり)である。遺物は東北端の灰色細砂から製塩土器等が出土した。

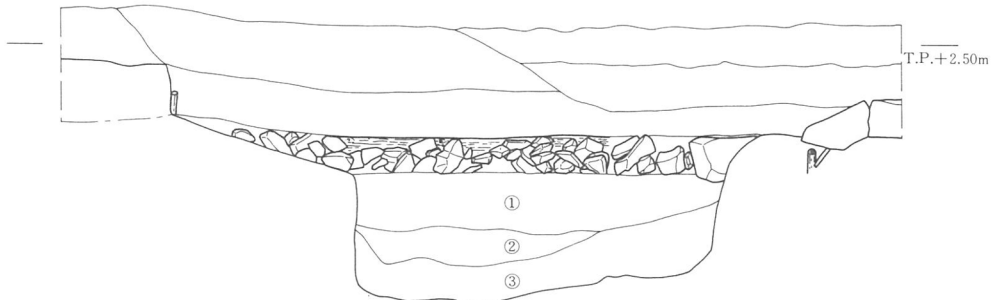
09-O R (第166図・図版73) VJからXJで検出した流路である。検出面での平面形状は蛇行しながら伸びている。両端は08-O Rに合流する。検出長8.0m、幅0.5~1.5m、深度0.095mを測る。断面形状は口の開いたU字形である。埋土は2層で、上から①灰白色細砂(10YR7/1)が0.2m、②明黄褐色細砂(2.5Y7/6)が0.2mである。遺物は中央部から弥生土器・サヌカイト片が出土した。



第166図 松原遺跡6-45区09-O R埋土断面図

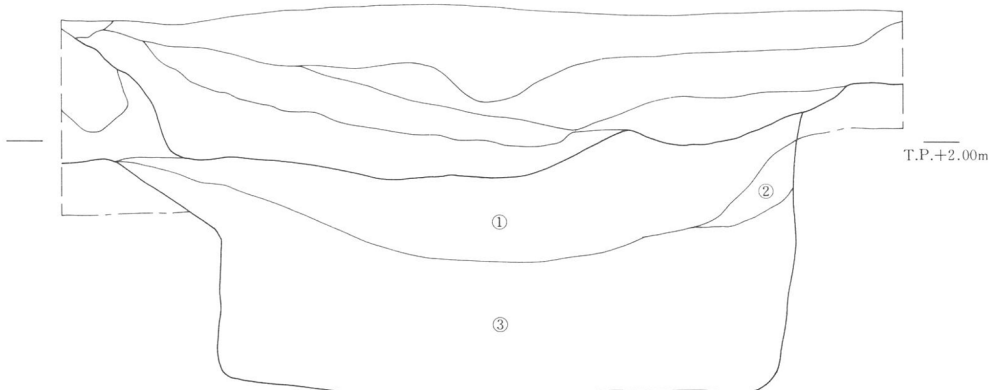
第2遺構面（付図10・図版68）

10-OR（第167図） YKからUNで検出した流路である。VLで二股に分かれて東北方向・東方向へ伸びている。南端は6-52区の11-ORに続き、東北端は6-44区へ伸びるが、不明である。検出長22.0m、幅0.5~3.0m、深度0.13mを測る。断面形状は口の開いたU字形である。埋土は3層で、①灰白色細砂（10Y R7/1：粘土混じり）、②灰白色細砂（5Y R4/1）、③灰白色粗砂（10Y R7/1：礫混じり）である。遺物は陶磁器片や製塩土器底部が出土した。



第167図 松原遺跡6-45区10-OR埋土断面図

11-OR（第168図） SRからBSで検出した流路である。検出面での平面形状は数条に分かれて東方向に蛇行しながら伸びている。東北端は6-13区の01-OR、西端は07-ORに続く。検出長37.0m、幅はUN~WPで13.0m、深度1.07mを測る。断面形状は口の開いた浅いU字形である。埋土は3層で、①灰色細砂（5Y 4/1）、②灰白色粗砂（5Y 7/1）、③灰白色粗砂（10Y R7/1：礫混じり）である。遺物は陶磁器や製塩土器が出土した。

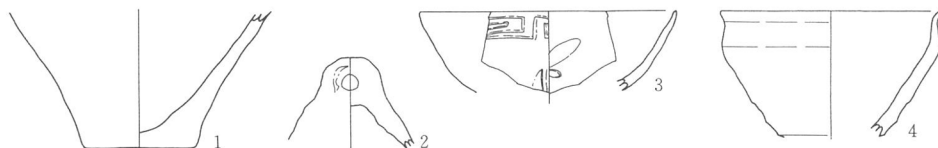


第168図 松原遺跡6-45区11-OR埋土断面図

遺物（第169図）

当区の自然流路等からは82点の製塩土器片が出土している。その多くは08-ORからの出土である。第182図の分類実測図を参照されたい。

No. 1は09-OR出土の弥生土器である。底径5.6cmを測る。磨耗著しく調整等は不明である。No. 2は第X層出土の須恵器飯蛸壺である。胎土等精良で、外面ヘラ削り後ナデ、内面ナデ調整される。No. 3は10-ORより出土した、15世紀代の青磁碗である。復元口径14.0cmを測る。内外面とも釉をかぶる。外面腰部に蓮弁紋、胴部に雷紋を配する。内面腰部から胴部にかけて花紋を配する。No. 4は11-OR出土の美濃焼天目茶碗である。復元口径12.0cmを測る。内面と外面口縁から腰部にかけて鉄釉系の釉をかぶる。「尾呂」（1990年瀬戸市教育委員会）掲載の編年付図によると連房II様式の田ノ尻窯式にあたり、17世紀後半頃のものであろう。



第169図 松原遺跡6-45区出土遺物実測図

まとめ

第1遺構面で検出した遺構は不安定な層位面に立地した近世～近代の遺構群である。08-ORは03-OSの前身となるべき流路である。出土遺物中には製塩土器が陶磁器片と混在している。09-ORは08-ORと合流する流路である。04-OSは幹線水路である03-OSに合流する耕作区画溝である。いずれも自然流路群埋没後に構築されたものである。01-OWは08-ORと同時期かその直後に構築されたものと考えられ、付近の開発の先駆的な性格をもつものである。

第2遺構面はほとんどカニ穴で占められる。10-OR、11-ORは第X層を削り込みながら流れる流路であり、近世段階において当該地が不安定な立地環境にあったことを示している。それに対して第1遺構面の08-ORはいくぶん安定した時期の流路であろう。

6-46区（付図10・図版62・74）

E地区の中央部で6-45区の西北に隣接している。調査直前は鉄鋼所跡地であった。標高はP JでT.P.+3.45m、T EでT.P.+3.70mである。調査区の形状は底辺が東南を向いた台形である。調査面積は約690㎡である。

調査により確認した土層は基本的に6層あるが、遺物は出土しなかった。遺構も検出しなかった。

層序（第170図）

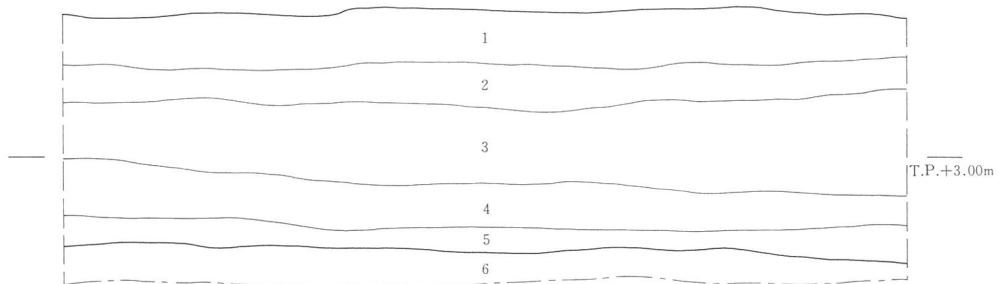
第1層 褐色土（灰色土・黄色土混じり：第II層）で、西北に向かって薄くなり、全域に広がっている。層厚はP Jで0.05mを測る。現代の盛土である。遺物は出土しなかった。

第2層 黒褐色土（7.5Y R8/1：第III-a層）で、全域に水平堆積している。上面の高さはT.P.+3.40mである。層厚はP Jで0.1m、MFで0.2mを測る。耕作土である。遺物は出土しなかった。

第3層 にぶい黄橙色砂（10Y R6/3：第VIII層）で、RH～T Eの間にはほぼ水平堆積している。上面の高さはRHでT.P.+3.30m、T EでT.P.+3.50mである。層厚はRHで0.1m、T Eで0.2mを測る。遺物は出土しなかった。

第4層 灰白色砂（10Y R8/1：第XI層）で、全域にはほぼ水平堆積している。上面の高さはP JでT.P.+3.30m、MEでT.P.+3.40mである。層厚はP Jで0.2m、MEで0.6mを測る。遺物は出土しなかった。

第5層 灰白色礫混砂（2.5Y 8/1：小礫混じり：第XII層）下部は黒色気味（7.5Y 2/1）で、全域にはほぼ水平堆積している。上面の高さはP JでT.P.+2.80mである。層厚は0.3～0.5mを測る。遺物は出土しなかった。



第170図 松原遺跡6-46区基本土層断面図

第6層 灰白色粘土・緑色気味（10Y7/2：第Ⅳ層）で、全域にはほぼ水平堆積している。上面の高さはPJでT.P.+2.40m、MEでT.P.+2.50mである。地山である。遺物は出土しなかった。

遺構

近代以前に人間の活動した痕跡は無かった。しかし、地山面上において、径数cmの穴が不定方向に掘られ、その穴に黒色粘土がつまったものが無数に見られた。これは蟹の巣の痕跡と思われるものであるが、出土遺物がなく、その時期は不明である。

まとめ

蟹の巣跡という生痕は時期不明のものである。他に遺構は無かった。

6-48区（付図10・図版62・75）

防潮堤脇の道路に接する調査区である。調査着手前は、土木造園会社の資料置場で、倉庫が建っていた。この調査区は遺構、遺物の存在が期待できないと予想されたため、6-47区同様にトレンチ調査を実施することとした。トレンチは幅2.0m、長さ50.0mのもの一本と、うち一本は倉庫の基礎のために掘削できなかったために長さ10.0mと25.0mとに分断されたもの一本の調査となった。

層序

地山は、6-47区のそれと同様である。地山面のレベルは、陸側端でT.P.+2.40m、海へ行く程に下がっていき、海側端ではT.P.-0.20mを測る。地山面から現地表面までは、現代の盛土となる。海側に近い部分は、産業廃棄物の堆積が著しい。この盛土は現防潮堤建設時にその内陸側を埋め立てたものと考えられる。

遺構

海に向かって落ちていく地山面を検出したのみで、遺構は見当たらなかった。

まとめ

このトレンチ調査の結果、6-48区は全面的な調査は必要でないこととなった。

6-51区（付図10・図版62・75）

大阪陶業工場敷地の東南隅部に当たる。工場建物と工場内の社が存在した。標高はT.P.+3.70mである。調査地区の形状は基本的に台形であるが、前述の建物の基礎等により現在の形となった。調査面積は約920㎡である。

調査により確認した土層は基本的に7層あり、第7層上面で遺構を検出した。遺構は溝2条と、大小のピット群、落ち込み等である。遺物は弥生・古墳時代及び中世の土器が出土した。

層序 (第171図)

第1層 工場建設時の整地土 (第II層) である。

第2層 褐灰色土 (10Y R4/1: 砂混じり: 第III-a層) である。旧耕作土である。上面の標高はT.P.+3.35mを測り、攪乱・整地により大部分は消失している。層厚は0.1mである。遺物は出土しなかった。

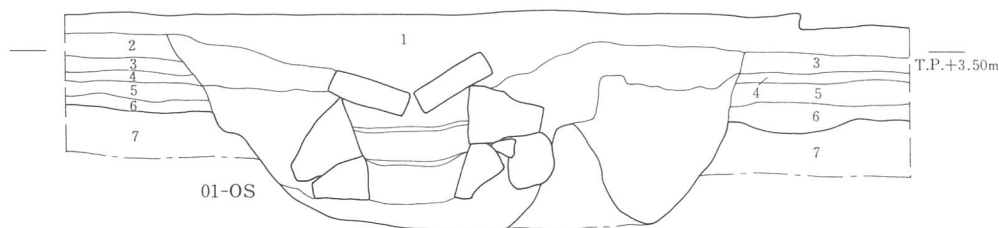
第3層 灰黄褐色土 (10Y R6/2: 砂混じりで小石粒を含む: 第III-a層) である。上面の標高はT.P.+3.50mを測り、T PからR Lにかけて部分的に水平に堆積する。層厚は0.1mである。遺物は出土しなかった。

第4層 にぶい黄橙色土 (10Y R6/3: 砂混じり: 第III-b層) である。上面の標高はU PでT.P.+3.40m、K QでT.P.+3.20mを測り、T PからR Lとで0.2mの標高差があり、各地点毎に水平堆積する。層厚は0.05mである。遺物は出土しなかった。

第5層 黒褐色土 (10Y R3/2: 粘土混じり: 第X層) である。上面の標高はU PでT.P.+3.35m、K QでT.P.+3.10mを測り、北方向に緩やかに傾斜して堆積する。層厚は0.1mである。弥生時代中期・古墳時代及び中世の遺物が出土した。

第6層 黒色土 (10Y R1.7/1: 粘土混じり: 第X層) である。第5層より粘土っぽく、土色・土質を明瞭に分層しえた。上面の標高はU PでT.P.+3.25m、K QでT.P.+3.00mを測り、北方向に緩やかに傾斜して堆積する。層厚は0.05mである。第7層との接合面は凹凸があり、砂粒を伴ってえぐり込む部分も観察され、いくぶん不安定な堆積状況を示している。弥生時代・古墳時代及び中世の遺物が出土した。

第7層 灰色細砂 (10Y 6/0: 微砂に近い: 第VI層) である。地山である。標高はU PでT.P.+3.20m、K Qで標高T.P.+2.90mである。北方向に緩やかに傾斜している。



第171図 松原遺跡6-51区基本土層・01-O S埋土断面図

遺構

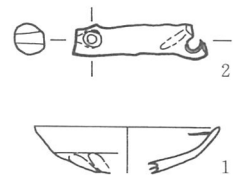
01-O S (第171図) T OからMT方向に直進する溝である。検出長37.5m、幅3.16m、深度1.08mである。掘込み面はU P側は第2層上面、S N側では第3層上面からである。掘込み面上部には第1層が厚く覆っている。断面形状はU P側の肩部では掘込み面から0.5m下で幅0.2mのテラス状の段をもち、S N側の肩部では掘込み面から0.2m下で幅0.7m、さらに0.4m下で幅0.2mのテラス状の段をもつ。段から下部は碗形を示す。両側に検地石を2段に積み上げ、灰黄色土(2.5Y6/2)と灰色細砂(5Y6/1:第3~第7層ブロックが混在する)により裏込めされ、上部にはコンクリート製の蓋が見られる。最終的には幅0.7m、深度0.7mの規模の石組の溝であったようである。溝内部には灰色泥土(5Y5/1)と浅黄色細砂(2.5Y7/4)が互層をなして堆積している。溝最深部には灰色泥土(5Y4/1)がレンズ状に堆積している。S N側肩部に接してU字形の掘込みが見られる。確認しえたのは幅0.9m、深度0.8mであり、埋土は灰色細砂(5Y6/1:第4~第7層のブロックが混在する)が堆積していた。

02-O S K Q・L S及びMT付近で断続的に検出した。総検出長8.0m、確認しえたのは深度0.4mである。埋土中に第5・第6層ブロックが混在して重複しており、現況水路の前身と考えられる。始期は16世紀以降が考えられる。

遺物(第172図)

出土遺物は弥生~中世のものが出土している。コンテナ箱半分程度の量で、全て4・5層(遺物包含層上部・同下部)よりの出土である。細片が多い。

図示しえたのは2点である。1は瓦器小皿で口径7.6cm、器高1.9cmを測る。口縁内面ミガキ調整、底部外面ユビオサエ調整される。2は須恵質土錘で残存長5.4cm、直径1.3cm、棒状のものである。両端部の2方向に円孔を穿つ。



第172図 松原遺跡6-51
区出土遺物実測図

まとめ

土層の堆積状況を観察すると第5・6層にまたがる乾痕が見られ、また両層の出土遺物が時期や種類に差が認められないことも考え合わせると、周辺の遺物を包含しながら継続的に両層は形成されたものと考えられる。

第4層で認められた標高差については、耕作面の段差を示すものと考えられるが、その方向性については判然としない。R NからMSより両側には第3層は存在せず、第3層削

平後に第2層の耕作面が形成されたと考えられる。RNからPO方向に延びる杭列と断面で確認した畦畔の位置が合致することから杭列の方向は耕作面の区画の方向を示すものと考えられる。

01-O Sの最終段階の水路部は暗渠化されている。工場建設時までは暗渠水路として機能していたようであるが、コンクリート・煉瓦・スレート・磚子・廃材等が多量に出土しており、大部分は工場建設時に壊されている。暗渠水路の裏込め埋土とU字形掘込みの埋土とは、含まれるブロック土との比較において時期差が認められることから、少なくとも2回の掘り変えが考えられる。溝構築の時期を特定することはできないが、調査区東側里道（通称浜街道）との関係を考えれば、街道沿いの側溝機能が考えられる。またあるいは大阪陶業敷地を囲う側溝機能も考えられる。

02-O Sについては、その位置関係から現況水路の前身と考えられ、始期は16世紀以降が考えられる。

ピット群と落込みについては、現在地の南側に移設されている社施設の植え込みや建物の基礎等の攪乱穴である。

遺物については、細片が多く図示できるものが少ないが、土錘や蛸壺片も出土しており、付近に海の生産に関わった集落が存在したと思われる。

6-52区（付図10・図版62・76・77）

E地区の西南辺で6-51区の西北に隣接している。調査直前は大阪陶業（株）の工場敷地であった。標高はPJでT.P.+3.50m、YUでT.P.+3.60mである。調査区の形状は底辺が東西を向いた多角形である。調査面積は約3,200㎡である。

調査により確認した土層は基本的に11層あり、第4・5層で遺物が出土した。遺構の検出面は2面で、第4層上面で溝、鋤溝、流路を、第11層上面で谷、流路を検出した。

層序（第173図）

第1層（第I層）で、全域に水平堆積している。層厚は0.1mを測る。攪乱層である。遺物は出土しなかった。

第2層 黄灰色土（2.5Y4/1：砂混じり：第III-a層）で、西北側が低くなっており、MGを境にして0.2mの標高差がある。PJ～GYまで堆積している。上面の高さはPJでT.P.+3.40m、MGでT.P.+3.10m、GYでT.P.+3.10mである。層厚はPJで0.3m、MGで0.1m、GYで0.1mを測る。耕作土である。遺物は出土しなかった。

第3層 暗灰黄色土 (2.5Y4/2：砂混じり：第Ⅲ-b層) で、西北側が低くなっており、MGを境にして0.1mの標高差がある。P J～G Yまで堆積している。上面の高さはP JでT.P.+3.10m、MGでT.P.+3.00m、G YでT.P.+3.00mである。層厚はP Jで0.1m、G Yで0.1mを測る。床土である。遺物は出土しなかった。

第4層 褐灰色粗砂 (10Y R6/1：小石混じり：第Ⅷ層) で、層厚に変化があり、P J～I Bまで堆積している。上面の高さはP JでT.P.+3.00m、I BでT.P.+3.00mである。層厚はP Jで0.1m、K Eで0.5m、I Bで0.4mを測る。遺物は土師器・須恵器片口などの細片が出土した。

第5層 黒褐色粘土 (10Y R3/1：第Ⅹ層) で、K N～J Lまで堆積している。上面の高さはK NでT.P.+3.10mである。層厚はK Nで0.2mを測る。遺物包含層である。遺物は土師器・須恵器・瓦器の細片が出土した。

第6層 灰黄褐色粗砂 (10Y R6/3：砂粒混じり：第Ⅺ層上部) で、O I～J Dまでほぼ水平堆積している。上面の高さはO IでT.P.+3.00m、J DでT.P.+2.80mである。層厚はO Iで0.2m、J Dで0.2mを測る。遺物は出土しなかった。

第7層 灰黄褐色粗砂 (10Y R5/2：砂粒・植物遺体混じり：第Ⅺ層下部) で、西北方向に厚くなり、P J～G Yまで堆積している。上面の高さはP JでT.P.+2.90m、G YでT.P.+2.90mである。層厚はP Jで0.3m、G Yで0.5mを測る。遺物は出土しなかった。

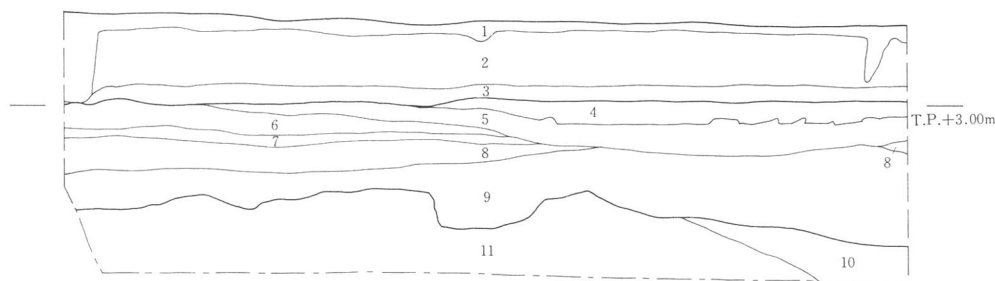
第8層 暗灰黄色礫混土 (2.5Y5/2：第Ⅻ層上部) で、層厚に変化があり、K D～I B～T Yまで堆積している。上面の高さはK DでT.P.+2.40m、I BでT.P.+2.80m、T YでT.P.+2.60mである。層厚はK Dで0.1m、I Bで0.4m、T Yで0.3mを測る。遺物は出土しなかった。

第9層 暗青灰色小石混泥粗砂 (5B G4/1：自然木・植物遺体混じり：第Ⅻ層下部) で、層厚に変化があり、O I～MGまで堆積している。上面の高さはO IでT.P.+2.60m、MGでT.P.+2.60mである。層厚はO Iで0.5m、MGで0.1mを測る。遺物は出土しなかった。

第10層 黒色砂礫混泥土 (7.5Y R2/1：第Ⅻ層) で、層厚に変化があり、P J～J Cまで堆積している。上面の高さはP JでT.P.+2.60m、N HでT.P.+2.10m、MGでT.P.+2.60m、J CでT.P.+2.30mである。層厚はP Jで0.2m、N Hで0.4m、MGで0.5m、J Cで0.2mを測る。遺物は出土しなかった。

第11層 暗緑灰色砂礫土 (7.5G Y7/1：第Ⅼ層) で、起伏があり全域に広がっている。

上面の高さはO IでT.P.+2.30m、NHでT.P.+2.00m、GYでT.P.+2.50mである。
地山（段丘礫層）である。遺物は出土しなかった。



第173図 松原遺跡6-52区基本土層断面図

遺構

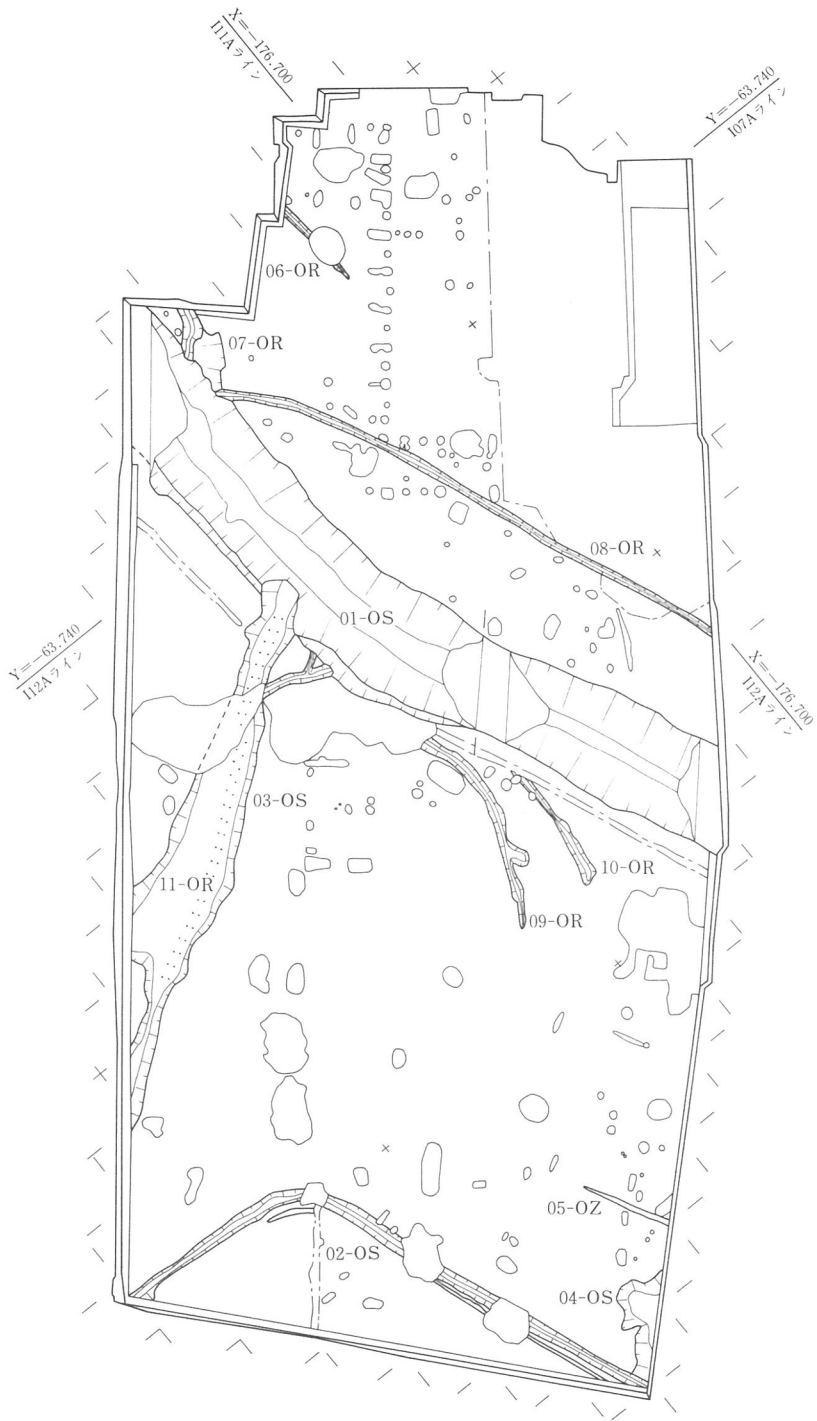
第1遺構面（第174図・図版76）

01-O S（第177図） FWの東北部からDEを通してCIの東北部まで東北方向に曲線的に伸びる溝である。東北東端は6-45区の03-O Sに続き、西端は調査区外へ伸びる。検出長50.0m、幅4.9m、深度2.0mを測る。断面形状は口の開いたU字形である。埋土は5層あり、①褐灰色粘土（5Y R6/2）、②灰白色粘土（2.5Y8/1）、③浅黄色砂礫層（2.5Y7/4）、④黒褐色土（2.5Y3/1）、⑤黄褐色細砂（2.5Y5/3）である。遺物は出土しなかった。

02-O S JPの東北部からLKまで西南西方向に伸び、LKで鈍角に屈曲してOJの南部まで南方向に伸びる、底辺が西を向いたL字形の溝である。東北東端、南端は調査区外へ伸びるが、不明である。検出長40.5m、幅0.6~1.0m、深度0.2mを測る。断面形状は口の開いたU字形である。埋土は1層であり、褐灰色土（10Y R6/1）である。遺物は出土しなかった。

03-O S（第175図） NGの東北部からJEを通してHDの西北部まで東南方向に直線的に伸びる溝である。西北端は01-O Sにつながり、東南端は調査区外へ伸びる。11-O Rと重なる部分があり、切っている。検出長24.0m、幅1.5m、深度0.5mを測る。断面形状はU字形である。埋土は2層であり、上から浅黄色細砂（2.5Y7/3）が0.1m、黒色粘土（2.5Y2/1）が0.4mである。遺物は出土しなかった。

04-O S HOの東南部からJPの東北部まで東南方向に伸びる溝である。東南端は6-51区の02-O Sに続き、東側は調査区外へ広がるが、不明である。JPで02-O Sに切



第174図 松原遺跡 6-52区第1遺構面平面図

られる。検出長8.0m、幅1.5～3.5m、深度0.2mを測る。断面形状は口の開いたU字形である。埋土は1層であり、灰色細砂（5Y6/1）である。遺物は出土しなかった。

05-OZ HNからFKで検出した鋤溝群である。条数は2条あり、東北東から西南西に伸びている。6-45区の05-OZに続く。長さ1.0～13.5m以上、幅0.2～0.3m、深度0.1mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、灰色土（5Y5/1）である。遺物は出土しなかった。

06-OR BVの東南部からBXの西北部で検出した、西南西方向にはほぼ直線的に伸びる流路である。西南西端は調査区外へ伸びるが、不明である。長さ6.5m、幅0.5m、深度0.1mを測る。断面形状は口の開いたU字形である。埋土は1層で、明黄褐色細砂（10YR6/6）である。遺物は出土しなかった。

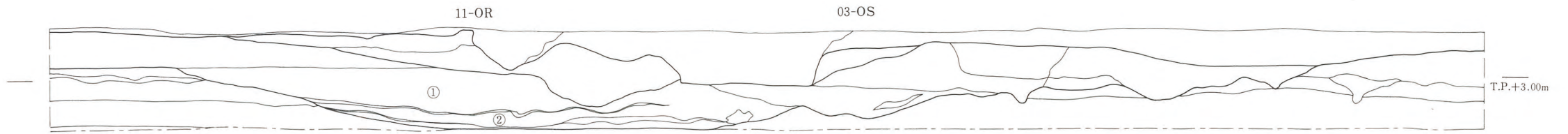
07-OR（第176図） DWの西南部からEWの東北部で検出した、短く湾曲する流路である。東南端は01-OSに切られている。長さ3.0m、幅0.7～1.0m、深度0.2mを測る。断面形状は口の開いたU字形である。埋土は3層で、①褐灰色土（10YR4/1）、②褐灰色細砂（10YR6/1）、③明黄褐色細砂（10YR7/6）である。遺物は出土しなかった。

08-OR AGからEXで検出したほぼ直線的に伸びる流路である。西南端は01-OSに切れ、東北端は6-45区へ伸びるが、不明である。長さ36.5m、幅0.4～0.6m、深度0.3～0.6mを測る。断面形状はU字形である。埋土は1層で、明黄褐色細砂（10YR6/6）である。遺物は出土しなかった。

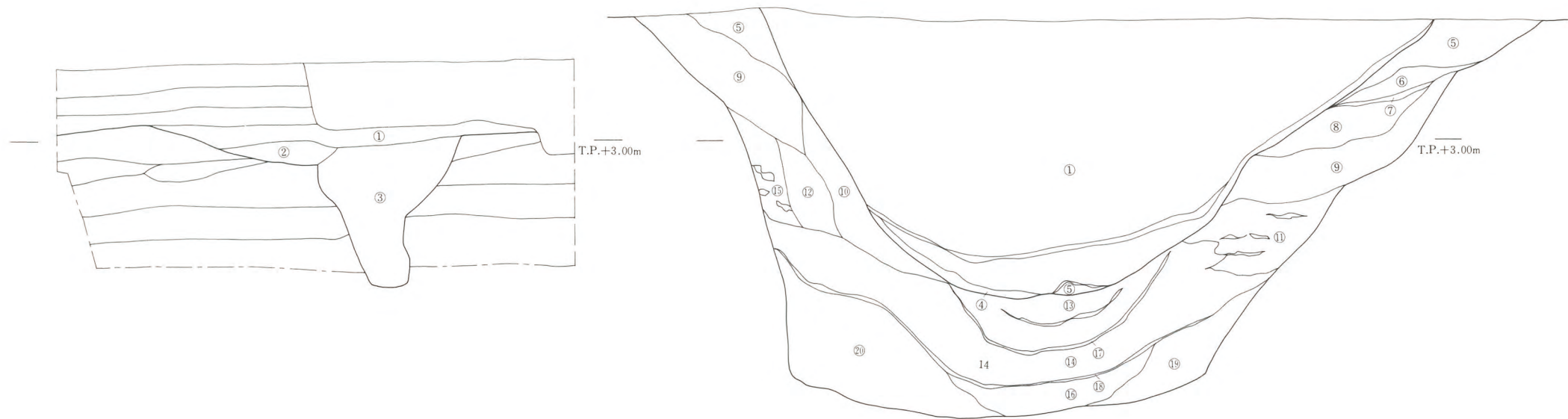
09-OR FFからFIで検出した湾曲する流路である。西南端は01-OSに切られると考えられるが、攪乱のため不明である。北東端で消滅する。長さ6.0m、幅0.3～0.4m、深度0.15mを測る。断面形状は口の開いたU字形である。埋土は1層で、明黄褐色細砂（10YR6/6）である。遺物は真蛸壺片が出土した。

10-OR EGからEIで検出した曲線的に伸びる流路である。西南端は01-OSに切られると考えられるが、攪乱のため不明である。北東端で消滅する。長さ3.5m、幅0.1～0.3m、深度0.15mを測る。断面形状は口の開いたU字形である。埋土は1層で、明黄褐色細砂（10YR6/6）である。遺物は出土しなかった。

11-OR（第175図） IDからLFで検出した直線的に伸びる流路である。西北端部で03-OSに切られている。東南端は調査区外へ伸びる。長さ36.0m、幅4.0m、深度0.6mを測る。断面形状は口の開いたU字形である。埋土は2層で、①黄灰色土（2.5Y4/1：砂と互層）、②黒褐色粘土（10YR3/1：粘土・砂の互層）である。遺物は出土しなかった。



第175图 松原遺跡6-52区03-OS・11-OR埋土断面图



第176图 松原遺跡6-52区07-OR埋土断面图

第177图 松原遺跡6-52区01-OS・13-OR埋土断面图

第2遺構面（付図10・図版77）

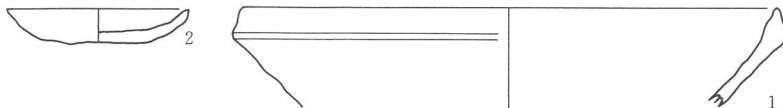
12-OR DJの中央部からJPの西北部で検出した谷である。検出面での平面形状は底辺が東北を向いた丸みをもつ五角形である。東北側は6-13区の最終面に続き、西南側は調査区外へ伸びる。長さ26.5~34.5m、幅37.5m、深度0.7mを測る。断面形状は口の開いた浅いU字形である。埋土は2層で、上から灰黄褐色粗砂（10Y R5/2）が0.3m、暗灰黄色砂礫混土（2.5Y5/2）が0.4mである。遺物は出土しなかった。

13-OR（第177図） BHの東南部からCIの東南部で検出した、曲線的に伸びる流路である。東北東端は6-45区の11-ORに続き、西端は調査区外へ伸びる。断面形状は二段で、上部は口の開いたU字形、下部はU字形である。長さ47.0m、肩幅5.5~6.5m・1段目深度0.9m、2段目肩幅4.5m・深度2.0m、底幅3.0m・深度2.9mを測る。埋土は15層あり、①黄褐色細砂（2.5Y5/3）、②褐灰色細砂（10Y R5/1）、③にぶい黄色細砂（2.5Y6/4：礫混じり）、④黒褐色土（10Y R3/2）、⑤褐灰色細砂（10Y R6/1）、⑥灰黄色細砂（2.5Y7/2）、⑦褐灰色細砂（10Y R5/1：礫混じり）、⑧灰色粘土（5Y1）、⑨砂礫層（2.5Y7/4）、⑩灰色粘土（5Y4/1）、⑪粗砂混礫（2.5Y6/3）、⑫明青灰色粘土（10B G7/1）、⑬砂礫（7.5Y6/1）、⑭灰色粗砂（5Y6/1：礫混じり）、⑮灰色砂礫（5Y6/1）である。①~④は01-OSの埋土で碇子等が大量に含まれていた。⑤~⑮が13-ORの埋土である。01-OSの底部で確認した⑤は掘削時に落ち込んだものであろう。遺物は出土しなかった。

遺物（第178図）

図示した遺物は2点のみである。いずれも12-OR直上の第4層中から出土したが、第4層は第5層の中世包含層を削り込みながら堆積しており、第5層中に包含したものと考えられる。

1は、須恵器片口で、推定口径10.8cmを測り、内外面ともナデ調整される。2は土師器小皿で、口径7.5cm、器高1.4cmを測り、内外面ともにナデ調整後のユビオサエ痕が見られる。



第178図 松原遺跡6-52区出土遺物実測図

まとめ

最終面12-ORは6-13区及び6-45区・44区の最終面へと連続する。逆「く」の字形の谷状地形を形成するものであり、西北部に向かって開口するものと思われる。出土遺物もなく、植物遺体とカニ穴の痕跡のみを確認している。西南部に偏して良好な中世包含層を確認したが、中世遺構の検出はなかった。当該谷部は近世以降も不安定な立地条件にあったと考えられ、13-ORや01-OS方向へ向かうOR群を検出した。鋤溝群や耕作区画溝の出現は、近世末から近代にかけての所産と考えられる。

6-53区（付図10・図版62・78）

E地区の西隅で6-52区の西北に隣接している。調査直前は大阪陶業（株）の工場敷地であった。標高はYTでT.P.+3.40m、OJでT.P.+3.45mである。調査区の形状は底辺が西北を向いた多角形である。調査面積は約1,500㎡である。

調査により確認した土層は基本的に11層あるが、遺物は出土しなかった。遺構の検出面は1面で、第11層上面で溝、落ち込み、流路を検出した。

層序（第179図）

第1層 褐色土（灰色土・黄色土混じり：第II層）で、西北に向かって厚くなり全域に広がっている。層厚はYTで0.2m、OJで2.5mを測る。現代の盛土である。遺物は出土しなかった。

第2層 褐灰色砂混土（7.5YR4/1：第III-a層）で、YT付近のみ残り、水平堆積している。上面の高さはYTでT.P.+3.30mである。層厚はYTで0.1mを測る。遺物は出土しなかった。

第3層 浅黄色細砂（2.5Y7/4：第III-b層）で、YT付近のみ残り、水平堆積している。上面の高さはYTでT.P.+3.20mである。層厚はYTで0.1mを測る。遺物は出土しなかった。

第4層 黒褐色土（10YR3/2：第IV層）で、西北へ向かって傾斜し、UN～QNに堆積している。上面の高さはUQでT.P.+2.90m、ROでT.P.+2.60m、QNでT.P.+1.10mである。層厚はUQで0.1m、ROで0.1m、QNで0.5mを測る。腐植土である。遺物は出土しなかった。

第5層 灰黄色細砂 (2.5Y7/2：第Ⅳ層) で、西北へ向かって傾斜し、T P～R Oに堆積している。上面の高さはT PでT.P.+2.60m、S PでT.P.+2.50m、R OでT.P.+1.50mである。層厚はT Pで0.3m、S Pで0.15m、R Oで0.05mを測り、無くなってしまう。遺物は出土しなかった。

第6層 にぶい黄橙色細砂 (10Y R6/3：第Ⅷ層) で、西北へ緩やかに傾斜し、U Q～T Pに堆積している。上面の高さはU QでT.P.+2.85m、T PでT.P.+2.60mである。層厚はU Qで0.1m、T Pで0.4mを測る。遺物は出土しなかった。

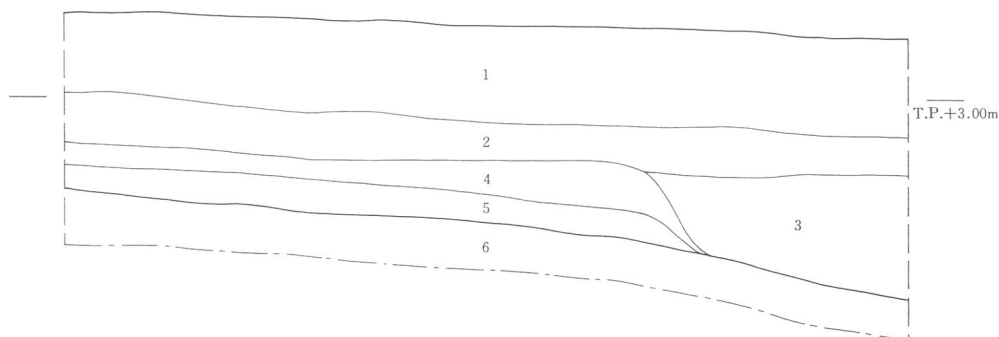
第7層 緑灰色細砂 (5G5/1：第Ⅸ層) で、P M～O Kに水平堆積している。上面の高さはP MでT.P.+0.95m、O KでT.P.+0.95mである。層厚はP Mで0.35m、O Kで0.25mを測る。遺物は出土しなかった。

第8層 黄色砂礫 (5Y7/8：第Ⅻ層) で、P M～O Lに傾斜して堆積している。上面の高さはP MでT.P.+0.60m、O LでT.P.+0.20mである。層厚はP Mで0.5m、O Lで0.8mを測る。遺物は出土しなかった。

第9層 にぶい黄橙色礫混土 (10Y R6/4：第Ⅺ層) で、西北方向に緩やかに傾斜し、U Q～T Pに堆積している。上面の高さはU QでT.P.+2.80m、T PでT.P.+2.40mである。層厚はU Qで0.15m、T Pで0.15mを測る。遺物は出土しなかった。

第10層 明黄褐色粗砂混土 (10Y R7/6：第Ⅻ層) で、西北方向に緩やかに傾斜し、Y T～V Rに堆積している。上面の高さはY TでT.P.+3.05m、V RでT.P.+2.80mである。層厚はY Tで0.4m、V Rで0.1mを測る。遺物は出土しなかった。

第11層 黄橙色砂礫 (10Y R7/8：第Ⅻ層) で、西北方向に傾斜し、全域に広がっている。上面の高さはY TでT.P.+2.60m、V RでT.P.+2.60m、S PでT.P.+1.05m、Q NでT.P.-0.50mである。段丘礫層である。遺物は出土しなかった。



第179図 松原遺跡6-53区基本土層断面図

遺構

01-O S Q Pの東北部からS Pの西北部まで南南西方向に緩やかな曲線的に伸びる溝である。南南西端は調査区外へ伸びる。検出長9.0m、幅0.4~0.5m、深度0.5mを測る。断面形状は逆台形である。埋土は1層であり、灰黄色細砂(2.5Y7/2)である。遺物は出土しなかった。

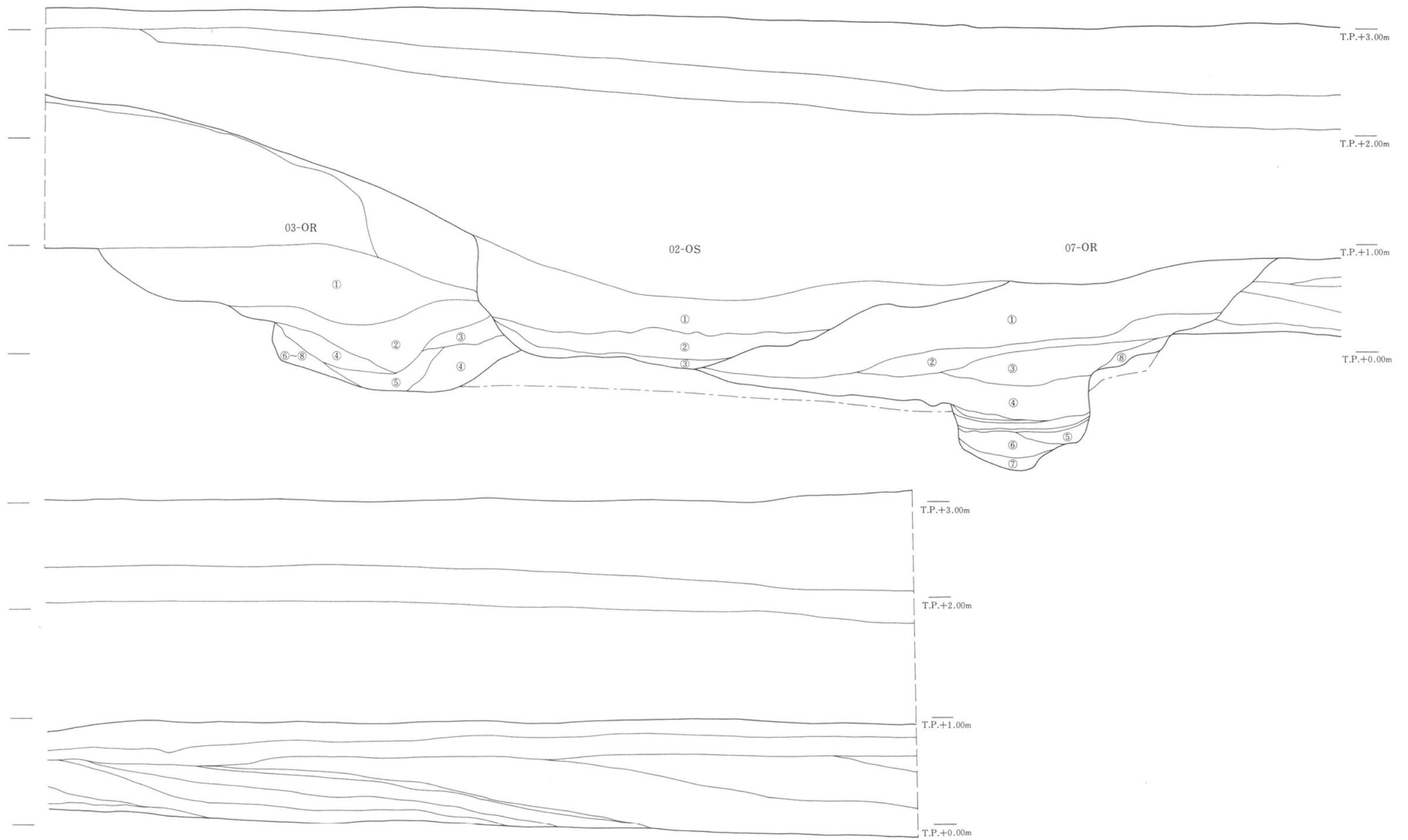
02-O S (第180図) Q NからO Nまで南東西方向に曲線的に伸びる溝である。07-O Rと重複し、切っている。上部は攪乱孔により切られ、北北西端は不明である。検出長13.75m、幅5.0m、深度1.1mを測る。断面形状は口の開いたU字形である。埋土は3層あり、①灰オリブ色泥砂(5Y5/3)、②灰白色粘土(2.5Y8/2)、③浅黄色粗砂(5Y7/4)である。遺物①の泥土中に碁子等が含まれている。②灰白色粘土状の碁子原料の廃液沈澱物が堆積していた。

03-O R (第180図) D OからQ Pの西北部で検出した不整楕円形の落ち込みである。長さ7.0m、幅4.0m、深度0.85mを測る。断面形状は口の開いたU字形である。埋土は8層あり、①にぶい黄色粗砂(2.5Y6/4)、②黄褐色礫混土(2.5Y5/4:多量の礫混じり)、③にぶい黄色粗砂(2.5Y6/4)、④黄灰色小礫(2.5Y6/1)、⑤黄灰色小礫(2.5Y6/1:人頭大の礫混じり)、⑥灰色粗砂(7.5Y5/1)、⑦灰色細砂(7.5Y5/1)、⑧灰色粗砂(7.5Y6/1)である。⑥~⑧層は互層である。遺物は土師器・蛸壺・青磁の細片が出土した。

04-O R R Oの中央部で検出した不整楕円形の落ち込みである。03-O Rとつながると考えられる流路の深い部分が残ったものである。西南側は調査区外へ広がっている。長さ1.8m、幅1.6m、深度0.2mを測る。断面形状は口の開いたU字形である。埋土は7層あり、①黄褐色細砂(2.5Y5/4)、②にぶい黄色粗砂(2.5Y6/4)、③黄灰色小礫(2.5Y6/1)、④灰色粗砂(7.5Y5/1)、⑤灰色細砂(7.5Y4/1)、⑥灰色粗砂(7.5Y6/1)、⑦黄褐色礫混土(2.5Y5/4)である。遺物は出土しなかった。

05-O R O QからP Rで検出した1カ所が突出した不整楕円形の落ち込みである。北北東端は調査区外へ伸びる。長さ6.0m、幅8.5m、深度0.45mを測る。断面形状は口の開いた浅いU字形である。埋土は1層であり、にぶい黄橙色土(10Y R6/4)である。遺物は出土しなかった。

06-O R R PからP Qで検出した不整三角形の落ち込みである。西側で01-O Sを切っている。長さ5.0m、幅3.5m、深度0.5mを測る。断面形状は口の開いたU字形である。埋土は1層であり、にぶい黄橙色土(10Y R6/4)である。遺物は出土しなかった。



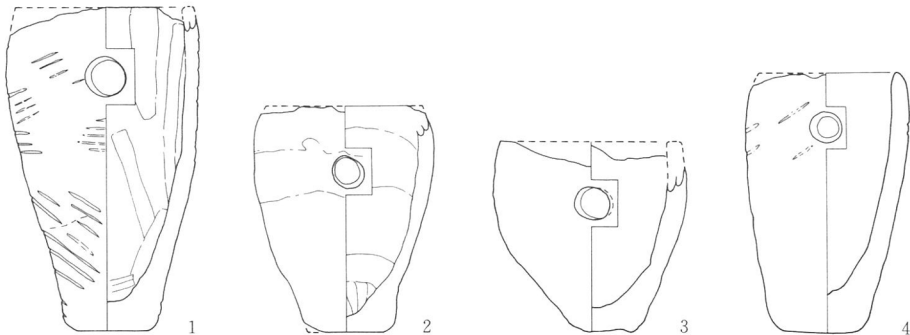
第180图 松原遺跡6-53区02-OS・03-OR・07-OR埋土断面图

07-O R (第180図) MNの西北部からNPの西南部で検出した屈曲して伸びる流路である。西端は調査区外へ伸びるが、不明である。長さ13.75m、幅6.0~7.5m、深度1.0mを測る。断面形状は肩部がいびつな口の開いたやや浅いU字形である。埋土は8層あり、①灰色泥土(5Y5/1)、②灰色砂礫混泥土(5Y4/0)、③灰色粘土(5Y4/1)、④灰色泥土(5Y5/1:礫混じり)、⑤緑灰色泥土(10GY6/1)と灰白色細砂(N7/0)の互層、⑥暗緑灰色泥砂礫(10GY4/1)、⑦明青灰色粗砂(5BG7/1)、⑧灰白色粘土(N7/1:泥土混じり)である。遺物は流心部最下層より寛永通宝と染め付け茶碗細片が出土した。

遺物(第181図)

飯蛸壺4点は、全て流路西側の砂礫層中よりの出土であり、いずれも土師質である。

1は器高13.2cm、口径7.4cmを測る。底部は平坦で、口縁部付近でややすぼまる。外面はタタキ調整、内面はナデ調整され、一方向に円孔を穿つ。内面底部はヘラ状工具で余った粘土を押し下げた様に見える。外面は粘土輪積みの痕跡が見られる。2は器高9.2cm、口径6.4cmを測る。やや小振りで、口縁部付近ですぼまる。外面の調整は不明、内面はナデ調整される。外面に粘土輪積みの痕跡が見られる。一方向に円孔を穿つ。口縁部には枝縄装着による摩耗痕が見られる。3は器高7.8cm、口径7.4cmを測る。最も小振りで、体部の厚さも0.85cmを測り、厚い。外面の調整は不明、内面はナデ調整される。底部は平坦で、口縁部のすぼまりもほとんどない。一方向に円孔を穿つ枝縄装着にする摩耗痕が見られる。4は器高10.6cm、口径5.5cmを測る。やや小振りで円筒状の体部をもつ。外面はタタキ調整され、内面はナデ調整される。体部の厚さ0.85cmを測り、厚い。底部は平坦で、一方向に円孔を穿つ。枝縄装着の摩耗痕が見られる。



第181図 松原遺跡6-53区出土遺物実測図(S=1/4)

まとめ

02-O Sと07-O Rは、大阪陶業（株）工場内で屈曲して6-52区の01-O Sと13-O Rにつながる。これらの流路の始期は近世、終期は近代と考えられる。これらの流路の西側片口上層には細砂層が水平堆積しており、下層は現汀線に向かって下降する砂礫層が堆積する。細砂層中よりの遺物の出土はないが、これらの流路の西側は河口付近の浜であったことがうかがえる。また下層の砂礫層中からは、飯蛸壺が出土しており、この時期付近が波打際の海底であったこともうかがわせる。時間的なへだたりはあるが、標高等より考えて、まさに波打際の堆積状況と景観を把握することが出来た。

2. 松原遺跡出土の製塩土器

今回の調査では6-44・45・52区において製塩土器の出土をみている。これらはいずれも製塩遺構に伴って出土したものではない。各地区の近世自然流路内や第X層（中世包含層）よりの出土である。破片を含めた出土点数は86点を数える。すべて脚台式と呼ばれるもので丸底式の出土はない。NO. 1～6は脚台式の各タイプ（註1）に分類して1点ずつ図示したものである。出土地区・遺構・点数等は第1表を参照願いたい。

脚台I式（NO. 1） 1点出土した。脚台部のみ出土した。底径5.4cm、脚高4.6cmを測る。外面は右あがりのヨコ方向の粗いタタキ調整。内面は粗いナデ調整されるがしぼり痕も見られる。体部との接合部付近はタタキ後ナデ調整されている。接合部外面の剝離が顕著である。色調は褐色を基調とし、焼成は堅緻である。胎土は粗く1mm～3.5mmの砂粒を多く含む。

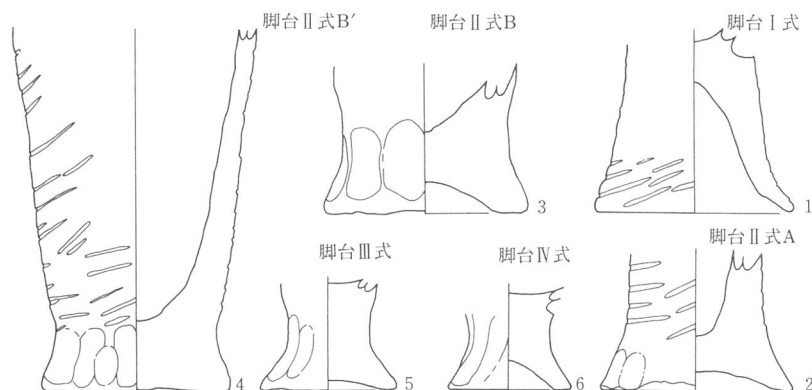
脚台II式A（NO. 2） 32点出土した。脚台から体部の一部にかけて出土した。体部の大半は欠落している。底径5.4cm、脚高1.5cmを測る。外面は右あがりのヨコ方向の粗いタタキ調整。脚台下端部外面はタタキ後底部周縁と同時にユビオサエ調整される。内面はナデ調整されている。内面底部付近はへら状の工具によるナデや刺突痕が顕著に見られる。色調は褐色を基調とし、焼成は堅緻である。胎土は粗く7mmの小石を含むものもある。

脚台II式B（NO. 3） 14点出土した。脚台部と体部の一部が出土した。体部の大半は欠落している。底径5.3cm、脚高1.6cmを測る。色調・焼成はAタイプと変わらない。Aタイプとの相違は底部の外周部が平らで中心部が窪むところであるが、各個体差があるようで、中心部がわずかに窪むものやへら状の工具で余った粘土を底部周縁に集めたものも見られる。底部の平坦面に木葉痕が見られることは最終的な調整を体部外面からのユビオサ

エで完結させた結果と考えられる。

脚台Ⅱ式B' (NO. 4) 37点出土した。脚台部と体部の一部が出土した。体部の大半は欠落している。底径5.1cm、脚高1.9cmを測る。調整・色調・焼成はBタイプと変わらない。Bタイプとの相違は底部が平坦でそのほとんどに木葉痕が見られることである。Bタイプ中の個体差とも考えられるが、体部内面の粘土を底部に押し下げた後の底部は全くの未調整である。底部の窪みを意識せず余った粘土を押し下げたと思われ、むしろさらに有り余る粘土を体部外面のユビオサエにより底部周縁に押し上げたものと思われる。底径のぼらつきはBタイプよりも大きい。これらのことや脚台Ⅲ式のように体部が椀型でないことから、脚台Ⅱ式の最終段階のタイプとしてとらえた。

脚台Ⅲ式(NO. 5) 1点出土した。脚台部と体部の一部が出土した。体部の大半は欠落している。底径4.3cm、脚高3.0cmを測る。外面ヨコ方向のタタキ、脚台外面ナデとユビオサエ痕、内面ナデ調整されている。色調褐色を基調とし、焼成は堅緻である。脚高が高



第182図 松原遺跡出土製塩土器分類実測図 (S = 1 / 2)

第1表 松原遺跡出土製塩土器型式別出土数一覧表

地区	土層名・遺構面・遺構名	脚台Ⅰ式	脚台Ⅱ式A	脚台Ⅱ式B	脚台Ⅱ式B'	脚台Ⅲ式	脚台Ⅳ式	小計
44区	第X層(中世包含層)		2				1	3
45区	08-OR		30	13	34	1		78
	10-OR				2			2
	11-OR			1				1
	第1面検出時				1			1
52区	第1面検出時	1						1
小計		1	32	14	37	1	1	合計86

いが椀形の体部をもつことから脚台Ⅲ式とした。

脚台Ⅳ式(NO. 6) 1点出土した。脚台部のみ出土した。底径3.4cm、脚高2.6cmを測る。脚台外面ナデとユビオサエ痕、内面ナデ調整されている。

(註1) 広瀬 和雄 「岬町遺跡群発掘調査概要」—小島東遺跡・淡輪遺跡—
1978. 3 大阪府教育委員会

広瀬 和雄 「近畿地方における土器製塩」『考古学ジャーナル11, NO. 298』
1988

上記収録の製塩土器の編年をもとに各タイプに分類した。

3. 松原遺跡のまとめ

松原遺跡の層序を概観すると、6-13・18・51区にまたがり第Ⅹ層(中世包含層)が分布する。市道本町羽倉崎線(通称浜街道)を挟んだD地区の6-3・9・14・17・27区にも分布するが、中世遺構の検出はない。6-51区では直下の第Ⅺ層上面を最終面としたが、6-44・45・52区では第Ⅳ層や第Ⅶ層の地山上面で多数の蟹穴を確認した。地山直上の土層は流木など植物遺体を含むが、貝殻や一片の土器の出土もない。6-52区の12-O Rは北東方向に広がる。埋土や蟹穴の存在などから考えて湿地状を呈すると思われるが、その形態や時期など判然としない。E地区で検出した遺構のほとんどが近世から近代にいたるまでの自然流路群である。このことは中世から近代まで不安定な立地環境にあったことを示している。6-44・45・52・53区で検出した連続する流路はこの間に形成されたものである。現在の稲倉水路などのような水利施設が整備されて、初めて開発が可能となったと考えられ、検出した鋤溝群や区画溝は極めて新しいものである。中世包含層を削りながら流れる自然流路より出土する遺物には弥生式土器片や製塩土器・飯蛸壺などがある。中世遺物も土師器・瓦器・瓦質土器片に混じり陶磁器も出土している。付近に集落の存在を想定できる。製塩土器片は86点を数える。すべて脚台式と呼ばれるものである。付近に遺構の存在を想定しうる。6-53区の砂礫層中より出土した飯蛸壺は標高や砂礫層の堆積状況より観て海中に投棄されたものと考えられる。付近に漁労に従事した集団の存在が想定される。

第4章 まとめ

末廣遺跡では縄文時代の石匙や古墳時代の土器も僅かだが出土している。いずれも遺構に伴わない。D地区5-51区05-OR最下層より13世紀中葉頃の瓦器碗が出土しており、中世まで遡る可能性がある。またこの流路を掘り込んだ流路も検出しており、明治年間作成の「地籍図」（作成年不明）中の地割りととの整合性や流路内よりの近世遺物の出土状況等より考えて、掘削の時期は近世まで遡る可能性がある。E地区5-14区で近世初頭の自然流路を検出しており、この中にも水路が掘削されている。末廣遺跡では近世初頭以降いまだ自然流路を利用した開発しか行われていないことを示すものといえよう。

土器が各地区で出土し始めるのは江戸時代初期の頃であり、量的に増大するのは近世後半から近代にかけてである。各地区において多数の耕作に伴う大小の溝等の遺構を検出している。その多くは現代の畦畔の方向と整合性をもつものである。地山削りだしによる整地も行われており、段としての痕跡も認められる。耕地開発による整地とは別に、末廣池より東側では旧陸軍明野飛行学校佐野分校の滑走路建設（註1）に伴う大規模な整地が行われている。水路と多くの灌漑用井戸は廃絶時期がこの時期にあたる。

灌漑用の溝や井戸等は耕地開発に伴う重要な遺構である。なかでもその水源として水の供給に重要な役割をもつものに溜め池がある。溜め池については現代まで存続する末廣池の堤を調査している。堤の下では大小の溝を検出している。

末廣遺跡は13世紀中葉頃に初めて開発がおよんだが、それは部分的かつ先駆的なものにとどまる。以降本格的な開発は近世末から近代初頭にまたねばならない。末廣池の構築時期（註2）もまさにその本格的な開発の一端であったと考えられる。

中開遺跡は海岸段丘から後背湿地を越えた、海岸に向かって緩やかに下降する斜面上に位置する。斜面下位部分では古代末から中世の遺構を僅かではあるが検出している。弥生時代の石鏃等も出土しているが遺構に伴わない。時期を明確にすることができる遺構は11世紀の黒色土器が出土した6-17区01-OWの井戸と15世紀の陶器・蛸壺が出土した6-10区14-ORの落ち込みがあるが、住居跡等の遺構は確認できなかった。人々の生活に欠かせない水を生産する井戸の存在は周辺に集落の存在を想定させるが、後世の人為的及び自然の削平を受け消失したようである。6-3区北端では14世紀以降の遺物が多量に出土している。遺構に伴わないが斜面上位から流され堆積したものと考えられ、付近にこの時期の集落等の存在を想定させる。これらの遺物に混じって、弥生時代や古墳時代の土器も

散見される。

斜面上位では古い時期の遺構は全く検出していない。水田等の耕作に伴う大小の溝が存在する程度である。全域が人為的に利用されるようになるのは水田として開発されたのが最初であり、現在の水田区割りに似かよった地割りが確認できる。これらの地割りの時期は明確ではないが、出土遺物や層位層序等より観て近世後半以降と考えられる。

松原遺跡は海沿いの沖積段丘面上に位置する。調査地点は南及び西南部分の縁辺部にあたる。6-44・45・52区では地山上面で多数の蟹穴を確認している。蟹穴や地山直上の埋土の広がりから観て、52区から44区にかけては東北方向に扇状に広がる浅い谷状地形を呈しており、その底部は湿地状を呈していたと思われる。しかし埋土中に一辺の土器や貝殻も見出せずその時期等は判然としない。中開遺跡で見られた中世土器の堆積層は6-13・18・51区にまで広がるが、ここでも遺構の検出はない。検出した遺構のほとんどは近世から近代にいたるまでの自然流路群であり、当該地が不安定な立地環境にあったことを示すものである。とりわけ現耕作土直下に自然流路の堆積層を確認しうることから、本格的な開発は稲倉水路等の水利施設の前身が出来てからのものであり、近代に至ってなされたものと考えられる。

自然流路内からは弥生式土器、古墳時代の製塩土器や飯蛸壺、陶磁器片等が出土している。とりわけ脚台Ⅱ式を中心とした製塩土器や飯蛸壺の出土は当効期に想定される集落の存在やその性格を暗示しているともいえる。

今回の調査で検出した遺構は平安から近代にかけてのものである。出土した遺物については縄文時代にまで遡るが、そのほとんどは近世後半から近代にかけてのものである。遺構・遺物の検出状況を観てみると、近世後半以降の耕作に伴う開発をうけて地形の改変が行われ、それ以前の遺構のほとんどは消滅を余儀なくされたようである。しかし各時代の遺物が量的な差異はあれ出土しており、今後海岸線に平行に調査を拡大して行けば、小規模ながら集落跡を検出できる可能性がある。

- [註1] 歴史科学 第94号 「陸軍明野飛行学校佐野分校跡の調査」
樋野 修司 1983. 9・29
- [註2] 泉佐野の歴史と今を知る会資料 第4号
「泉佐野市・田尻町における 史料にみる水利・開発年表」
井田 寿邦 編 1988. 12. 20

報 告 書 抄 録

ふりがな	すえひろいせき なかびらきいせき まつばらいせき
書名	末廣遺跡・中開遺跡・松原遺跡
副書名	関西国際空港連絡道路ならびに連絡鉄道建設に伴う発掘調査報告書
巻次	II
シリーズ名	(財)大阪府埋蔵文化財協会調査報告書
シリーズ番号	第89輯
編著者名	阿部幸一・石田成年・今村道雄・岩瀬透・岡一彦・岡本武司・城野博文・辻本武・仁木昭夫・藤沢真依・三宅正浩
編集機関	財団法人大阪府埋蔵文化財協会
所在地	〒540 大阪市中央区谷町2丁目2番20号 大手前ウサミビル5F TEL 06-942-3885
発行年月日	1995年3月31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 ''''	東経 ''''	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
すえひろ 末廣	おおさか ふういづみき のし 大阪府泉佐野市 たかまつ 高松	27213		34' 24' 00"	135' 18' 40"	89・12) 92・10	63,500	道路及び鉄 道建設
なかびらき 中開	おおさか ふういづみき のし 大阪府泉佐野市 まつばら おおにし 松原・大西	27213		34' 24' 10"	135' 18' 20"	同上	26,000	同上
まつばら 松原	おおさか ふういづみき のし 大阪府泉佐野市 かさまつ 笠松	27213		34' 24' 20"	135' 18' 10"	同上	21,000	同上

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
末廣	田畑	近世	井戸・土坑・溝・ 鋤溝・畦・堤・谷・ 流路	石匙、弥生土器、 石鏃、須恵器、 瓦器、近世陶磁 器	
中開	田畑	平安 鎌倉 室町 近世	井戸、土坑、落 ち込み、溝、鋤 溝、谷、流路	弥生土器、須恵 器、黒色土器、 瓦器、蛸壺、陶 磁器	
松原	田畑	平安 近世 近代	井戸、土坑、溝、 谷、流路	弥生土器、製塩 土器、石鏃、須 恵器、瓦器、近 世陶磁器、塔婆	

(財)大阪府埋蔵文化財協会調査報告書 第89輯

末廣遺跡・中開遺跡・松原遺跡

関西国際空港連絡道路ならびに連絡道路建設に伴う
発掘調査報告書
II

平成7年3月31日発行

編集 財団法人 大阪府埋蔵文化財協会
〒540 大阪市中央区谷町2丁目2番20号
TEL 06-942-3885 FAX06-942-5962
大阪府教育委員会
発行 財団法人大阪府埋蔵文化財協会
印刷 株式会社 中島弘文堂印刷所

